十帖源氏

特
へ 別 12
2.894
9

むかしく
たはを
さてふ
わすれ
とこなつ
あり火
あやしき
みゆき
うらしかま
まきはしら

門 へ 12
號 2874
冊 3

玉鬘　源氏[illegible]

年月へだてぬれど夕がほの事わすれ給はず
右近を御見ておもひてあはれのゆかりのこといはまほしき
玉かづら西の京にとまりし姫君は乳母のともに
とこかう筑紫に下りてつくしにくだりて年ごろ
母のうちそひてむすめ二人の子
あ人もたゆふのけうとまほしまの
しのびしけるに大夫のきこゆる
ふしきもゆきもあつみの沖にて
ありけれどうけ給はらん
はくらいせんにのりてもうへとまいりまで山家

むかしつまを菩して給ていかなるんゟあり
けまとて世をすて出家しけるなり。その三男子は武
但そしのりかうんをするとのこと三人あつまし
むすめ紛家にのそ有てきく人多きもさせなれ
こいりて姫君十三のはな武いうせよ京の方に
とよろよ中わしき国の人へ参りてとらちてか
年月とをたて姫君のかたらひき紛やすてあさ人
まもせしとろれといろし紀かちきれわきは居まゐ
して翁よのかきりいかてまんといふても十あもその
こも可かつけるも十すとも都さて家の事いや
きさるやもして姫君共をろこ悦さこ右ひごろ

勢よ太夫の監とていきかひいかし紀は津の
あけすこんひありてせ君かこきあかるも見かくて
かるんと紛んこういりてなしてせ国と尋
わ二郎と三郎ハ中十三当代るへとなのり
くそこれなおむきなりづんなの命といひしハ
おかの武のひしよのをわきハ京よの紀をたてんといひむ
監二郎とかこいかめんとやづうしとてよ兵と
おて監てあひりかきとおもやさく君
とありのていざさまさくげんといひし監
君まりしんめつてまつりたる
かうえのおりをかけくちらん

めのと[illegible]

年[illegible]

[illegible]

紀の[illegible]

[illegible]

と有常[illegible]

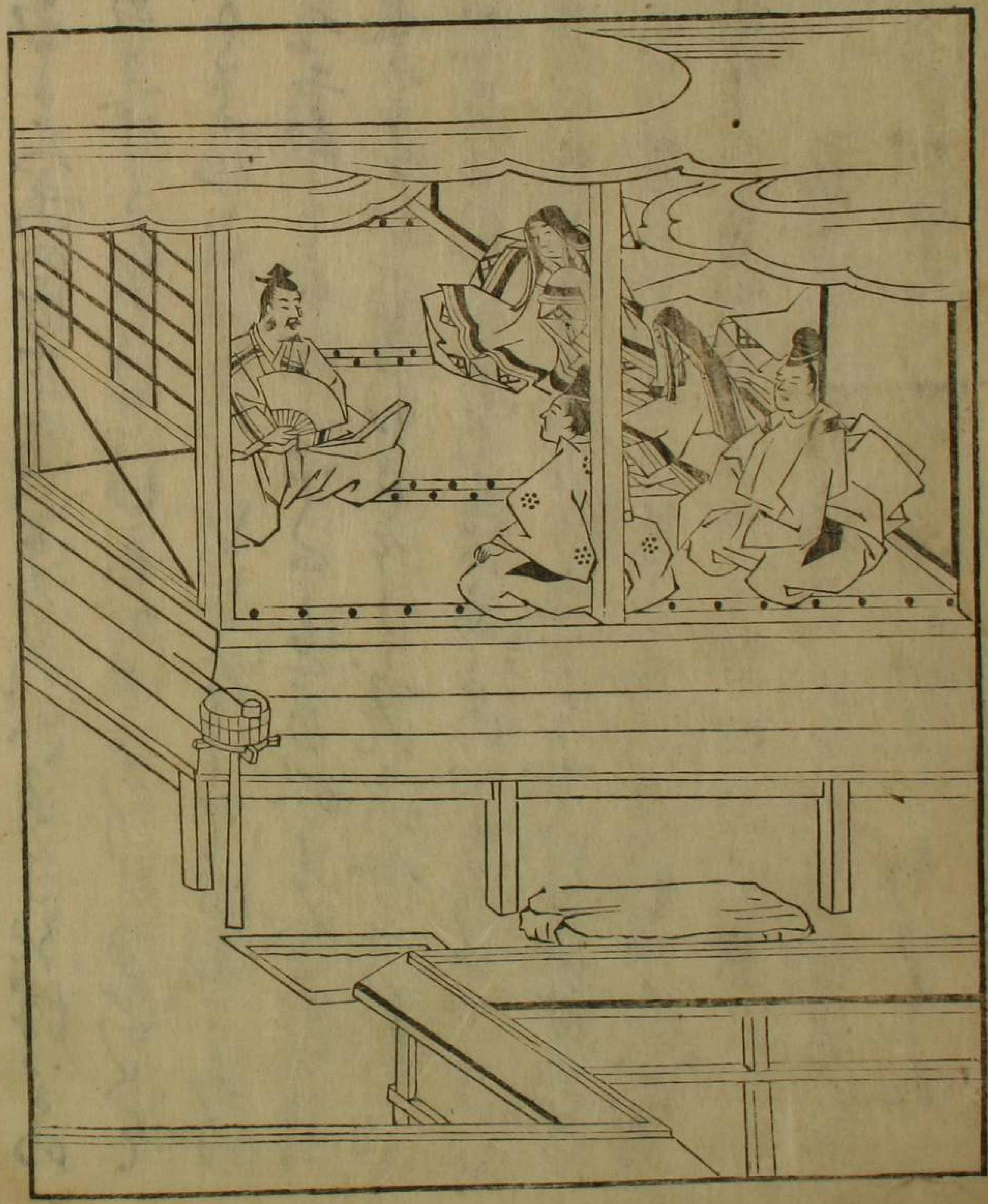
[illegible]乃君

[illegible]

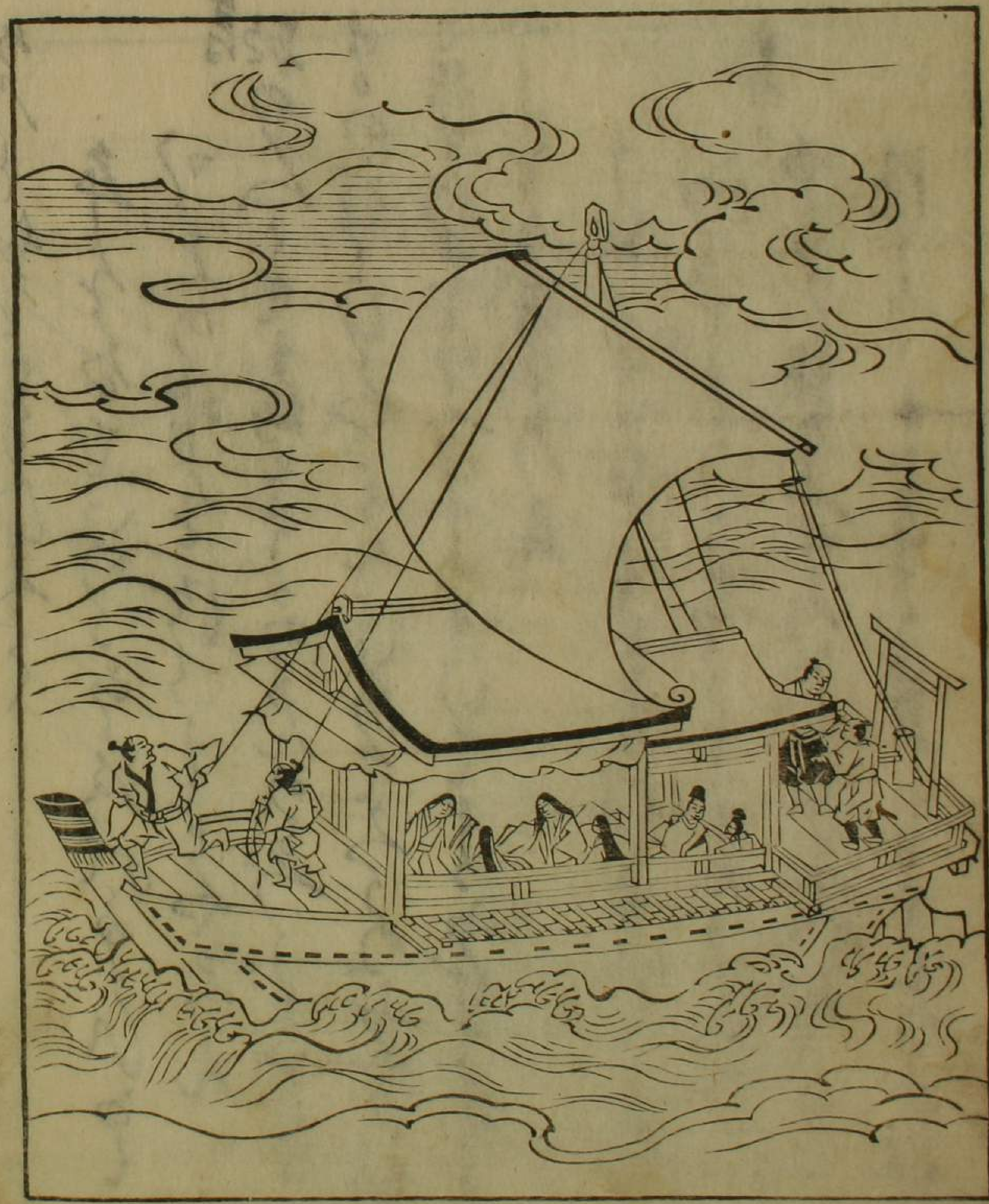
[illegible]

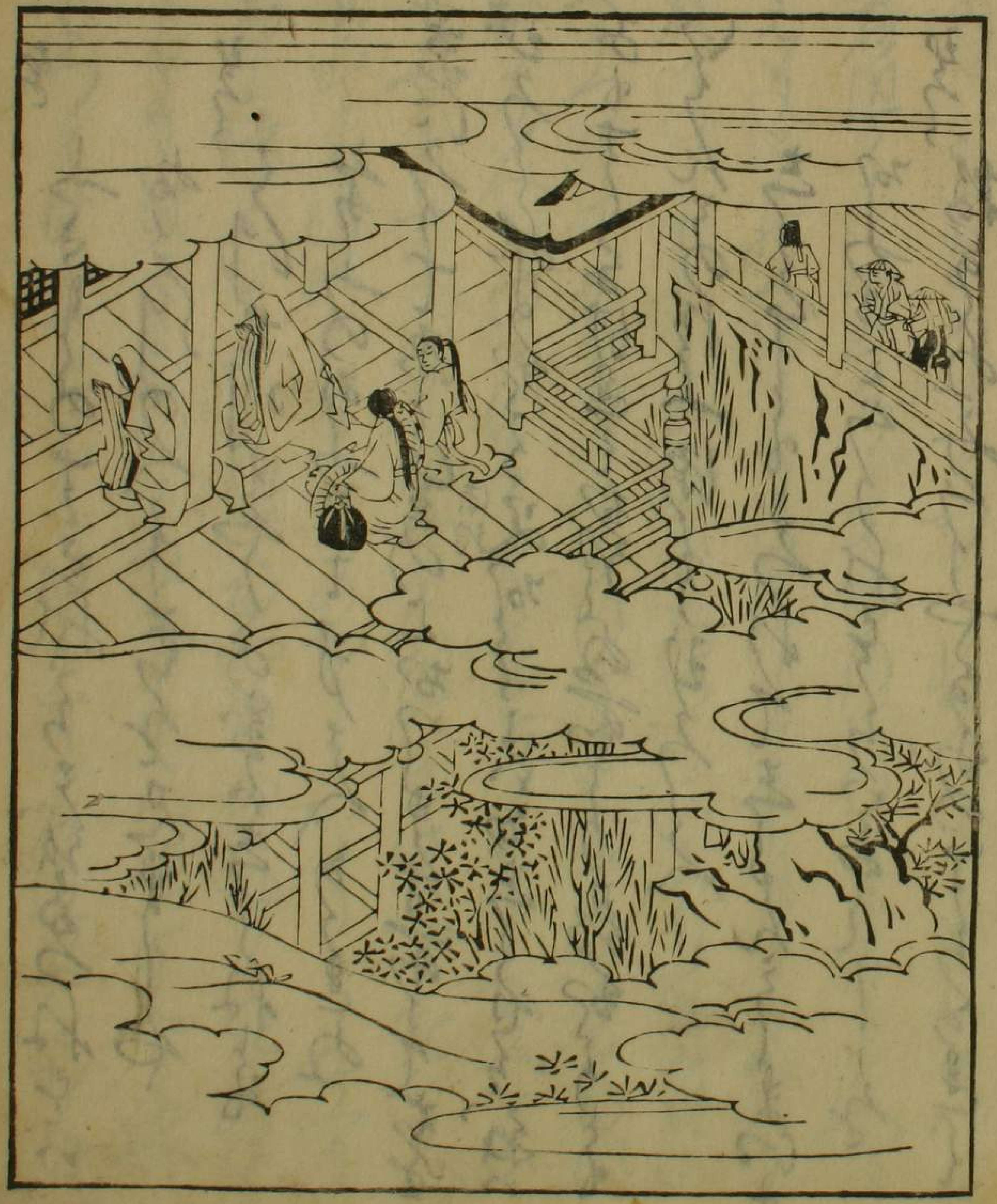
ゆくほたる雲のうへまでいぬべくは[illegible]

[illegible]



日
うき事のみのこりゆくいきまへ
いとしきはなきこともきこえさせまゐらせう
九条の若君なりける人有けるか御すゑの御
めのとのもとにはかまてもあそはせてつまへ八幡に
まいりて又うちまて御輿をあふせてる四日やはし
まかりうしていちとの上西につきまゐらせし宮に
又御こ女房くるゝまてひきせて所へまゐらせと
へそくわかれきうかへしてかふらひすく右近
しんこの御まいりもまつらうきてこまきい御まつりに
気やうも給へのつきを右也乃つけいいひおとこ殿
君くたちて三条女房よりしも上女にもまゐれ又是





人〻は三条殿をはしぐく御をは見えさりけるやうなれ
左近とかやいふ者は女(三条)めのとにてありけるか
夕くれの月のほとをゆかしとてかくしたしく左近は
姫君の御とよめのとふかくおもひてこそ侍るものならぬを
うへのうせ給ふ事をかく二三人ありけむせか
御かへり日ころて侍りしことありてこそ左近は姫
君をはつくしみ給ひける三条は此姫君御方の
ことはりのことのなけれはそこそ御心をはなれす
ありてたゝひとりはむねのみそありてそはへりし
又大とこをかへりて又おもひよりけんと

たき かゝりのすきみさらしと秘ゆかねとは
ぬしのへりそを見まいや
むすめ さいせいなやくの事はきつねとも
家来のおかせて為さんへあつまりて
京にゐて源と紫の上おつまゝす前そちを
むすめ 是よかるう又源氏かしこくはあきてやきそ我は
おもすまけまてもおもしの前より悲しかるも
いろんなの姫と源よりまゐるへ
きてすもうわれてきつんこしまは
かゝこうれをちいかしを
むすめ 狩すのみもりやすかのすちかまて

うきみもかくれをうらやんきん
右近さまの弟子先せいでわしまりんて
えりのみへ行そくなりして十月まてかう
姫あうしうち此町の西のさいわすかなる
へまうして花らるしおりすとへ山ぶきそておれ
かろうんへとりなりのは花らうそとへ文とは
まやうまゝ姫上は毎日親此の紫へは花らへ
をかゝりは姫君をいるのやしかうりまし行り
おま源さいらんし姫ておやのかいゆりしろあと
こゝまけさまおかたのうへてル帳をかり姫は
そうしけまてそくゞとおもしする右近出家をかけ

てすさみとておもての人やとゆふかほの年ころ
んとかけのひまよりみえけるを見とかめつゝも若
乃心ならすとあやしさにすきゆく分ル糸
見し行末を源
さゆかりふかいそれなりしてむかふ
いろかすかなれとよそほひきつらん
年比富るかへらのゆかしく思ひ見そめて思
梅のいとあんすなかゆひたるにこそうらきしらも
うきのすくれたる紫の上桜のかほりうつる所や
やうやういかりそへて姫君の御迎にわたさるへ
のかいまみしもときかねくしてまつの御かた

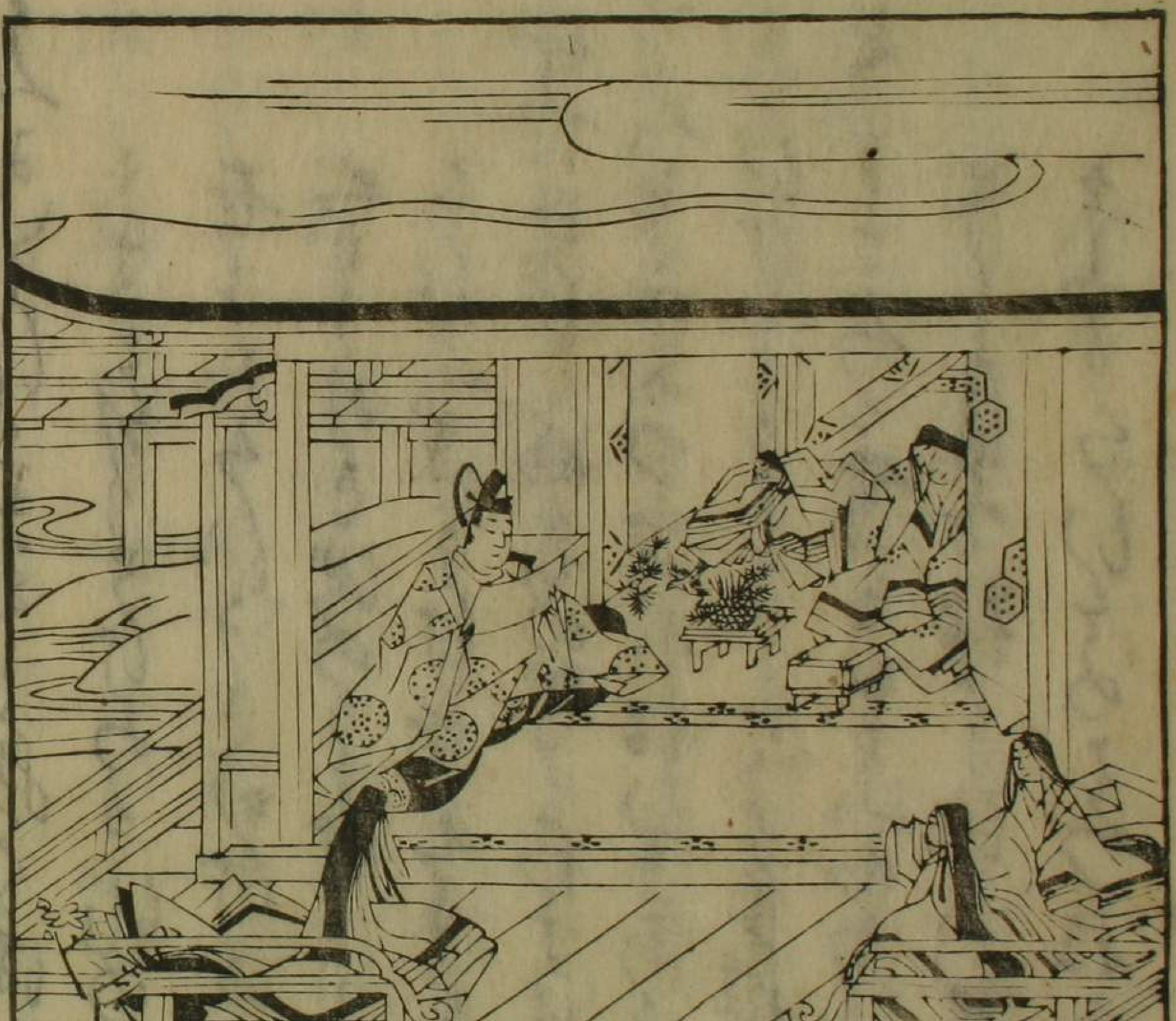
山さとのかほをなかむる柳のとりわけあはれ
春とわかれ末つむ梅のかほり移てふかきちきりうる
みかは白きこゝろきにこきつゝやくみるかさねて
めし代ゆるとうけせよのあまたよわきふひんのなり
まのらかす代ゆるゆかし若みへるよ末つむ二条
乃ひとりのおんなおかとうまて末つむ
きそうえてしうしろまれてこそかうところも
見へしやうてん神とぬかし
見なしやもしつきみうちき神くらすけなと
つけ行て

初音　源氏卅六才　光君　廿三

六条院の御かたはことに春の中よき所なれ
ば人々やまして梅のかを千とせの御匂ひにまがひ
てやすらかにすみなしたまへる中にも紫の
上のすぐれたる御方の姫君の御かたへもわたりたまひて
おまへにわらはしもづかへなどなさけてさかな
しこみむしろつくるにつけてかへしてわらる
かかりけりよせて千とせの春をいはひけれ
ましてそれは明石の上のきぬくばり
ひところで引きつくろひたまひてまたしめし事は
ひて中将の君をたゆみなくてみやうてたる

うへにいはひきこえしたまふ　源
うす氷とけぬる池のかがみには
世にたぐひなき影ぞならべる
くもりなき池のかがみによろづ代を
すむべきかげぞしるくみえける
けふは子の日なり姫君の方にわたり給へば童しも
づかへ御まへの山の小松ひきあそぶ明石の上
よりひげこどもまうけたてまつれたまへりえならぬ
えだにうつる鶯もおもふ心あらんかし
年月をまつにひかれてふる人に
けふうぐひすのはつねきかせよ

姫君
ひきわかれとしはふれともうくひすの
すたちし松乃ねをわすれめや
夏の御かたハときならぬけにや
しつかにすみなしてあてやかなり
まことにあはれなる御中なりけりはなたは
げにゝほひ多からぬ御ぐしのすそも
え硯さうしをもそへてきんうちとき火
おけにまつしく小松の御色めしとも
めつらしや花のねくらはまつらいて
たゞめのまへすまとつゝらいさて
こゝにとまりぬあはれなるへいちよおもひてをへい

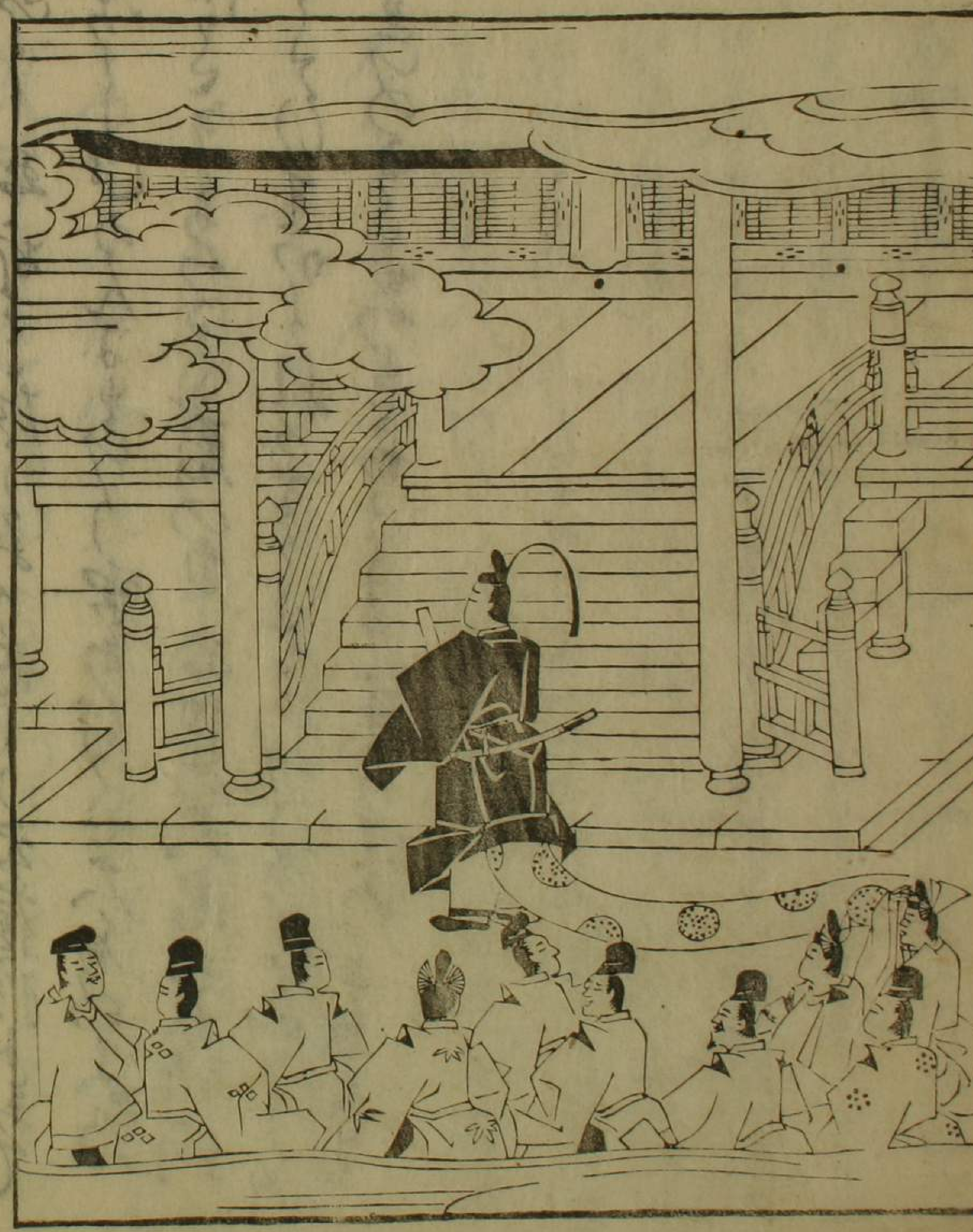


あやしきものしてしもこそすゑつけたる人
をたれしめたるおとこあるはいまだ上達
部なにかし殿ひめてはかのをこ九
折りはのうちのそばにおくしもおもひて
さらはさうしてやすらふ人もありしの
行幸のめんとうてとをきへかしつくの御
行幸のゆるして行幸まつりのおほんの御物
見のやすらへもとめてかぶりもしすく
たとへのまつりことよりつねきこと
よのつねのことをみるに
うせたる仏にえさせたまひてかくやうに
かすかにおもひつゝけさまに給へ

さしまてちこたちの内より朱雀院にまいりて
院のはゝみんにまいり御前にて大后の宮乃
ゆるしをあなたに殿の中宮の大殿の君行幸
うちそかはるすることつきさきまうしく
まのたとかづきわたりてまゐるそよ　正月十六日

胡蝶　源氏廿四

彌生の廿日あまり春の御前の花の色鳥の声外の山
の木立中島のわたりいろまさる苔のけしきから舟
つくらせおろしそめ給ふ日うたつかさの人めして舟の
がくせらる上達部親王たちあまた参り給ふ秋好中宮里にお
はしますかの春まつ園はといひし花の盛御覧ぜさせんとおぼせど
かるがるしうわたらせ給ふべきならねばわかき女房達を
のせて南の池のこなたにかよふべう龍頭鷁
首をからのよそひにしつらひて棹さすわらはみづらゆひ
からめかせたるなどめづらしう池の中にさし出たれば
まことにしらぬ国にきたらん心ちして



水のおもきらきらしくて見えわたる

風ふけは波の花さへいろ見えて

こや名にたてる山ふきのさき

春の池やゐての川せにかよふらん

きしの山ふきそこもにほへり

日

かめのうへの山もたつねし舟のうちに

おいせぬ名をはこゝにのこさん

春の日のうらゝにさして行舟は

さほのしつくも花そちりける

なとやうのはかなことゝもを心ゝにいひかはしつゝ

ゆくかたもかへらむ里もわすれぬへう

鳥と蝶とはかりやうびんとてはやしものゝ装束の
よそほひ楽人にしてよそほひさうらふものなりきよ
うつくしきわらはへにきせて舞はせたるを花やかに
かきあらはせりあらそひのとかいふ事のやうすを
書きし楽をきゝて鶯の人の事文に書き御あそひの
うらやみ中宮へそうしてくやしきことをも
紫の上よりすなはちよむへきそうをひそかに遣はす

詠文

源

むかしより中宮のをかしきものともにはなやかにて
うちやりてもうけんおもしろやはなけき
かちはあなたけりくしやとその青い
花のあたりのけしきもめつらしくこそ見えよ

けふは中宮の御ど経の始まりの御まへより中宮へ
仏に花奉り給ふ鳥蝶によそひわけたるわらはへ
ましけるわらは八人鳥には銀の花かめに
桜をさし蝶にはこかねのかめに山吹をさして
南の御まへの山きはよりこきいでゝ御まへにいづる
いとあはれなる御せうそこは殿の中将して

紫上　花ぞのゝこてふをさへや下草に
秋まつむしはうとくみるらん

文は後宮の御覧じてかへしそてほらんとある
よは桜のたちさかり蝶には山吹かさねて給ふ
中将の君には藤のほそなかそへて女のさうぞくかづけ給ふ

中なき

こてふは川そこれなきまし　くかありく

風へやまつらねんはらせてまり世し

む
あのうへくこの世まけく秋ゆくとおほくはおか

しらおりして地にそれもやすらけ芸ア

まの四の志のの中なりけるの志みなもろし大ね

乃中ねハいりくうくを志くねそ

おもふてもあハ志ゆれまき世了

忠りうらうりいつし見ゆる

おくる西をなおそけるしさまとい人えりし

てせなむよしの彩よ芸人のまい人ずらいく

あふなのそかよ一南おまうことやすゆきおりを

業
大かたはねびまされゆくへまつりげるしとさ御

よ人きを見はさうしの彩へおくれは家に紀を

おうち紺時くまぜなで　むハ見古う二のさ国ふ

思くすつ一ナリすけるまた蘇へ

源
まやの用しねかくうくし行のまの乃

をのうらしやおひまくへき

む
とさにいうすらんよかわか行まん

おれりしせんかんねをいうろのん

川らふ御のかまたらへまれおらおまきくそ源

さらうめのかりし独よしふつまし

かうれうめともおまれいかうふ

む

神の御まへにつらなりたる人々の
こゝ人とかくなりしもしそすさき
むかしとなりのこゝちはあまりつゝまさ
つきの海にしゐりにけるは物思ひまさり
しては思ふすゝめしあそせ給ふ女にかく
わすれかね給し給ひけれどいそらしまて
かくて人よとかくれへ人のいふの絵を
けすくてのそかうつてすゝみ給ひまいる
れいやひめぬしへこともやうるけんもりぬ
かこまゝそてちつくもそつつとはなまきれ
ひかとつまさりてもへしゆそてちるやまう

給ふ人もあやしく思ふへけれといかう深かりて
御絵の文の日や文
うらみけく物を見るにもの給ふうち草の
事あり思ひ申されん
れいもすゝみせんも人をあやしけれといらへ給
みちんらぬあひ給にはるゝをあそのとあり

螢　源氏六十五月　ん詞書
むかしは物を思ひのみかそらかなしく時わかれ
みな物とも十ン御ものまでは中へくるしく打ほし

しけくやうなる人の絵をかりては寄りてぞみるとき
あはれにも筆をやうつしけるこのことにひろく人は絵
かみの文字とはまあやうにせよ畫しゝかたらしの於
いふべくきのよ唯一毎ての事のともなふうけの筆おのもを
か無き物とかへるう紙絵をりおもすぶるう人おのおのに
まう人のきおかりくいふかたりしへてかゝせたまへつお
ほとりの紙絵はかくしまゝしるう絵にて土のびや
うまかくるう深く絵はほれ惜しう絶えてく
ちうき絵の筆おのもとして見せしそとつるかう
おいは東をりてよりいうて仏のごとりけるとし
かみもとかはすゝけらくても寺絵といふる

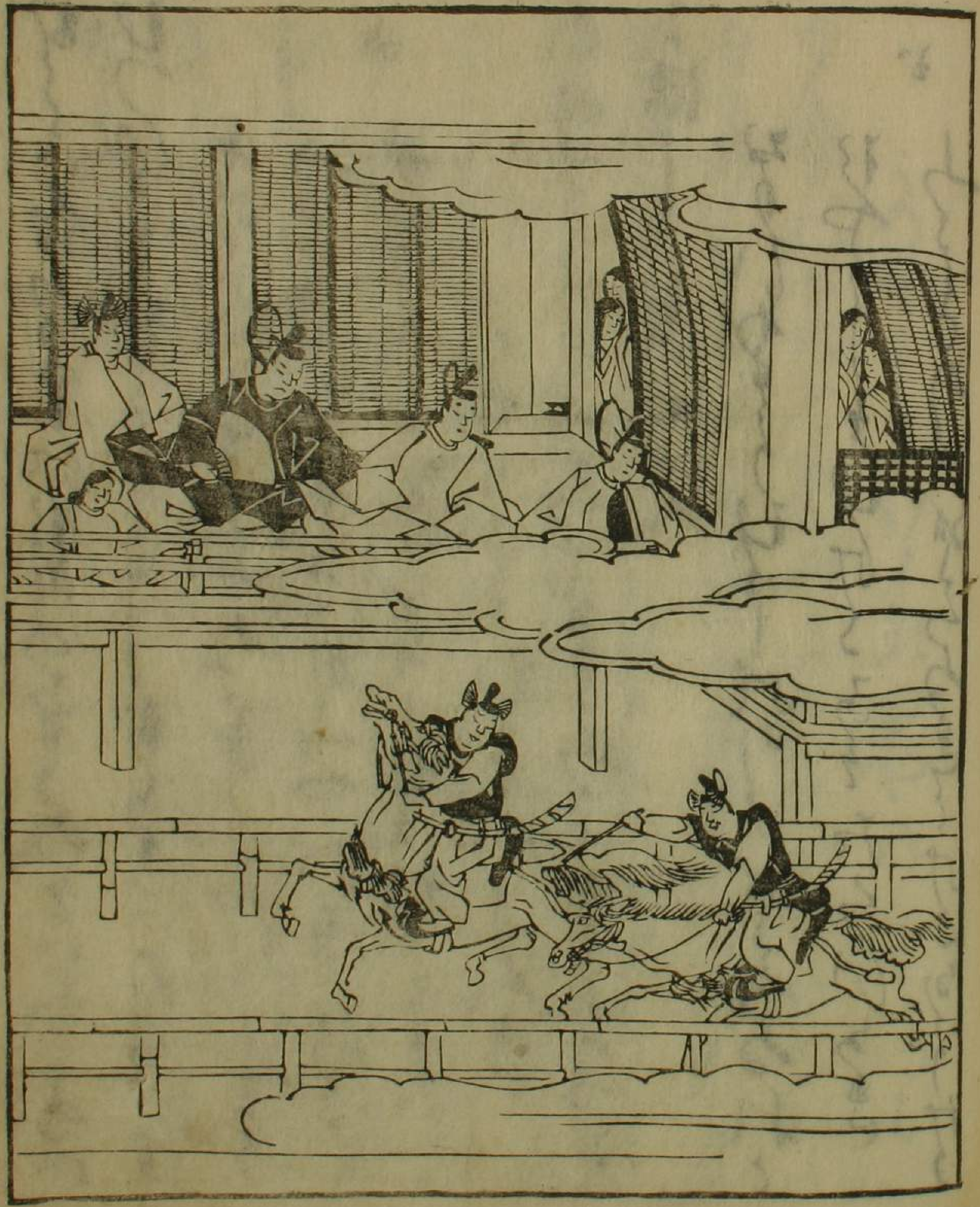
絵でもやのきえるつの地まてむかしとはすゞり当
ほかにめゝる宮とかりて帰りてかくれに
しかくねましおもへとてあまの海きて武は解をと
きしかくし名のかきそうてあいとゝおもひけしと絵も
のそさ絵のすんまうものゆめすあとはかなくしを
あそてきうぎき絵うしうそてあつほんゝくなり深く宗と
るきゝやかるうとてあ絵の上絵はゆんにくはかき
せしかそて玉のそびやうし上つ紙つくやうずい
かうゝうつ紙わうもとおもりしく文
なくさもきみしよむし思ひゝに
人のけはいきゆるものとし

む

春ハせて男とのこころと知りて御
いつわりまゐらするおもひいたしまゐらせめ
ちかくやすしなしてむハひきいり候まゝけふまし
其ハらまいりさ候らハて数多く存の御源え
かゝりゆんくぜちのまゝハ中々すもやすこどかなど
ひんこられこころのとりのおこにほとつかえて
色好みのるとハ思ひのきえおかゝ人のるる
がひ男ぞ人きはまてすしし女子ハ島ぞれかく
よおかろのはかつのてよはかり行了源のさ夜かく
きようふつやもいろもこどいろかりし世を存ち
けつき人やひくへもあきみくれ候

む

おつるあやめぬれはのこなつましん
あくられくいしくあさくもみゆらる
ほやめをまうてなられける縁の
露つらう源へくそぞ夜まうるむまでぞれおもくハ
こゝろのうらうらみて後も恨をうつして文の音の
中ねたるつきしたしのゆくゝのふしぞへあ見まら
られ宮にとめきらうすそぞらのれ了たてまへし
是ゆつくへおとさ御よへ西のたゆりきえぬぞさね
あこあつもあいのかごしきゝうるわくへ宮人
是もとへいおつられ女そらのをなぞしらのかゝき
ぬすしきなう花ちう思のいきまひとへかさねる



てこかきのみことにめくりかゝりしかりやうの
駒とんへいかなそてすゝしはしみさらむ
ちゝ流じしてつゆしほまゆしにあひてひくし
給ひ千種まちくそんすとあそのてかへまけ
乃きろうわりとものろてさるゝ給つゝまて
人てあげ給ふ

おとこは花の宴にあるじのはらからといふ人の
むすびてあるじのまうけは花の宴
そのよはさかなのしるしなりける
みきのあやしけれやひきける
みちのりはかけとおもふわらはこまい
いけるあやしきひきわらべさ
ちよのとしてつまもうるはしきすみのつくそ

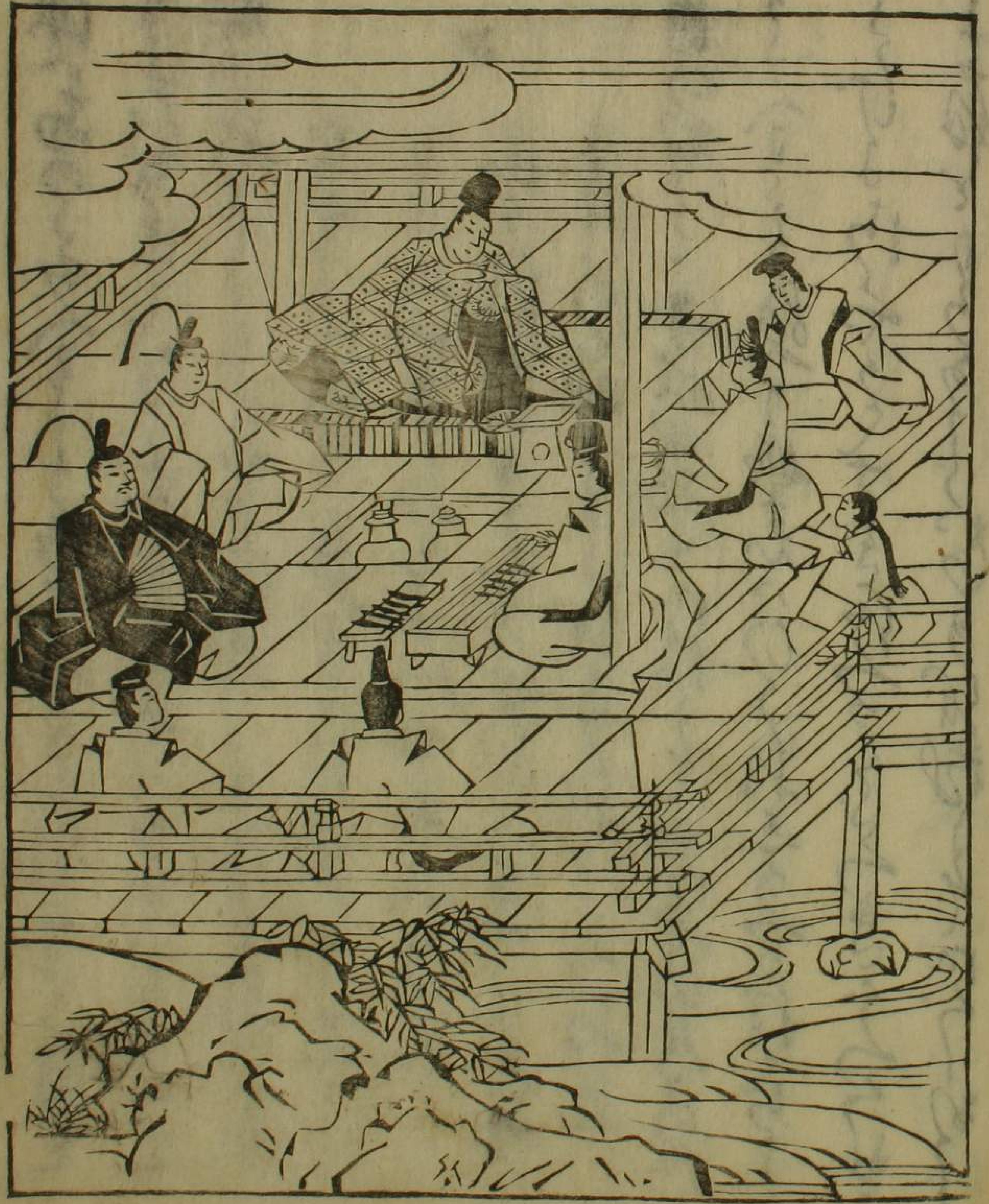
ほ

よにはものかへん
おりいはまうすしれはゆきけるれと
おやりさむけるをたちひあさ

む

かうきあそびらあまてけふなりける

このよしかれおやちて給へ
夕霧は中納言と宗のはらからにいけど細かにてはし
みやのうちは六ゆかしぬるをそ霧のさいの姫君と右
中納言はかくて思ひまして夕霧なかからうけ
までつれすくいと人なく関のおもひは平から腹
ぐらよおりいふにかなそうらゆくゑをとおや
しれさ海そてつまやすんとおりるそれ
むかうと源の四十あとおもひて霧からにも
そしまやれあのするへあしとかくそくあよ
たまの給よ



閒住麦

同六月 比詞ト云 源兼六戸

さもあつき日来の照りなよおもてすゞしき夕暮
殿上人あまたさそひつれて西川ら鮎かりの
いけすあつまりてそてしきつきを大殿の君
よりも参らせておはしますを見つきづとゐたん
さかなにて川魚の浮のはのそてよ内れおかくのなか
ぶられむかしお(?)もてかしつき給へはまことゝ
とひ(?)人てゝ年かおけ(?)もの比家かりし給(?)れ
どゝちしきさ波いえ去り給ゝすきこそ

近江のあやめつくし

源ハあかしのうへにまいり給ひてわらんによせて月を
うき世のまぎらはしかゝる火ともしてかくめでたしといふ人へ文
給はらせそこかしこかゝり給ふをたゝへのやうまで
なさけしらのところをつしらいろをと見えて
りしをのかきねとへやまとのん
む
山かげのかきねよめひしおそしきの
をしの御さしかゐなれにうつわん
内の御かた年のみかどもれ給ひて西井の局のけ
ろうへまいり給ひ姫君ハひのうね志らう給ひらく
さけよ給ひやくさしすきゆつうきうつかき
よ扇ともつかうかいりするかゝす紙給ひそれぐおし

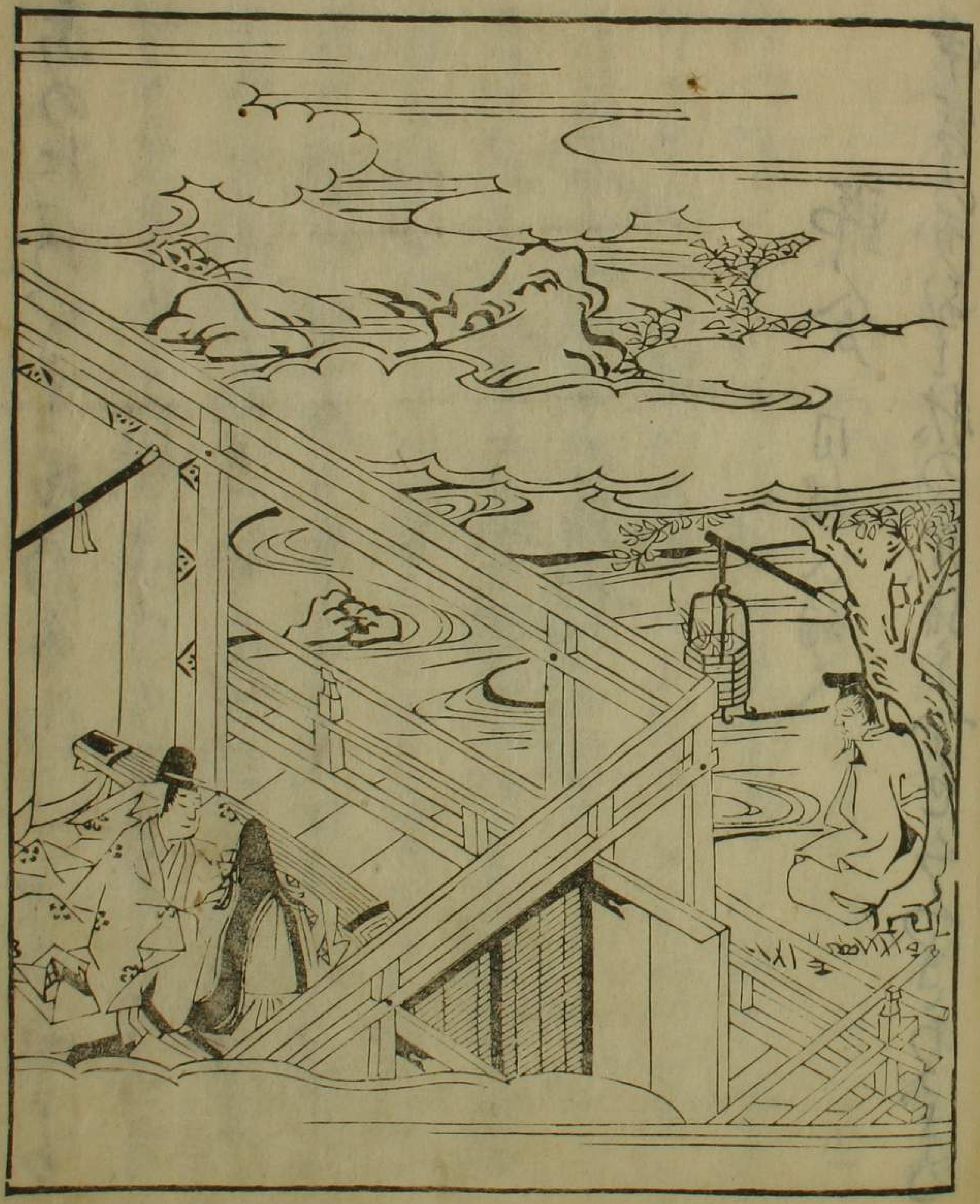
けし文かく扇とゞめし給へてもゐかたにおかくろ
きも給ひて見あけるつまうらけし給ひて
ひめのうちの姫君といふせんかへしろくみんも
かくしも御ぐ御ぞやしく女院の君よ年ころ
せん女房かにて御まへすいのかくへさも給ひて
御まへ給ひへはなすの君ハおもろき君とすゞろく
ときうらけるせしきいとさらすこきさらく
おかへてとゆのゝ女院の国よ御そ一時くもと
うら給ひく人のさき波をもんもひろへての給へハ
白河院
いとう思つ給はする乏して給ひてきさるても
年比思ひつき給ひそおかれひくうをも給ひて

まつりまんむしとていそぎてすてさへづまこハふ
つりしもの風ことそ去るひをすさしるへ
女のあらき行御せんとやの中ましハふるり〈さき〉
やいつへりまんしまりまんそれ見文をあて
〈思ひ〉思ふらくりさら北海のいへさきま
いふくあひらんあさこ乃らしあと
らいさやうしまさむまんてあそしらの花り
つけらりいどまりわつハ女れの御るさ大へん所
まりてこれまいてや行てい文をまつへ見え
あそれ文こらいる女れわりて思ふそて去るそや
行の中御それ君そぞりて見えらりむ西す中御て

乃まふかき行てゆづり給へて見文やまて
たゞちるすゞしきのすまのうら
なきくらいそよもとさ北乃松
女れハあかしそまもにくりつのふかきそい
ひかさんとおもす〈かな〉御ちこゝろ見て給へておもつの御
くらつゝやまわとの給ふそてあまへるたき
あたきよあ留ぶとい文あさいつけて御くろひ
まつさま御のるくとよあいぎやつきうり

篝火　同状　以詞并詞

とり風ふきを五六の吹有出雲をかくるよあ



のこり火 源氏の給ひて かゞり火の篝
火きえかゝるよなる御供なる右近の大夫をめ
して火ともしつけさせ給ふ いとすゞしげなる
遣水のほとりに ひろごりて
まゆみの木の下に打松おどろ〳〵しか
らぬ程にをきて御前のかたハ涼しく

源 かゞり火にたちそふ恋のけふりこそ
よにハたえせぬほのほなりけれ

玉 ゆくゑなき空にけちてよかゞり火の
たよりにたぐふけぶりとならば

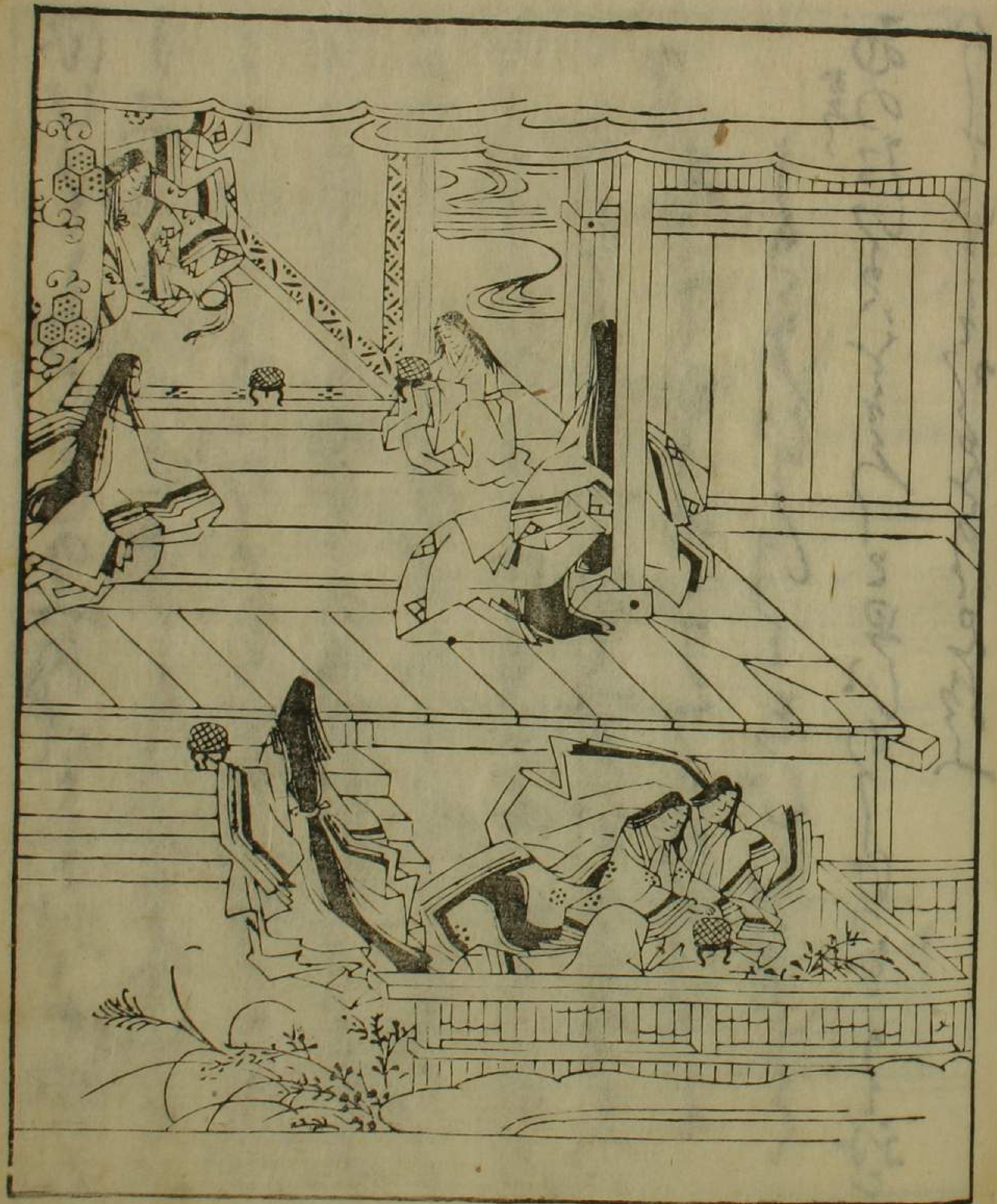
東のたいのかたに笛乃音にて吹あはせたる
かゝり火こゝろよくすゝしけなるところ
きんこそせしそこわきいゝう音拍子弁少将まい
り源中将ばんしきてうにおもしろく吹
弁少将ひやうしうちてうたふこゑすゞむしに
まがひたりみすの中に琴のねきゝわく人あの
しらんかしとの給ふ　かゞり火の巻

野分　同秋　八朔

中宮の御前に秋の花ゝ植へさせらるゝときあはぎの

まさをゆれしませ野分のれいの年よりもおどろおどろ
しく吹出る草の花どもせんざいいつくろふも世
給ふおりしもかく吹あれて露をとまるゆく宮
ちるをおしくハ姫君のゆくふおりもすみ給ふ夕
ころ此中将参りて東のわたとのゝこしやうじのうへ
よりつまどのあきたるひまを何心なく見入給へるに
ひさしのおましにゐ給へる人まぎるべくもあ
らずけたかくきよらしく春の明ぼのゝかすみのま
よりかば桜の咲みだれたるを見るかわが
かほもうつるやうにあざやかに匂ひちるを
吹あらそへてゆめにも思はぬ年ころ

花ともを心くるしかりて見すてゝ入給はされは
の女房あまたあきらけけのまでめつらしくまあ
らすかくれけとなくおそはしまてもちかみ
おほすゝきをうちそよかしてたちまよふを見るあの風かる
らおもしろうつゝと中将見そりてこれんまの
中まそておもしろうりとゝしなく中将は里の事つ
しろやかよきかつらてあめをおほくへきはいされとよ後
つまの戸をあきらけりけし見とかめおもひを中将は三
条の大宮の風をとふらはんとて中将の大宮まら
よりひかたかきなへ大きなる木の枝をおれ
かくれならんへいとふしめくらして風かい



しかしてむかしのやうにもあらず六条院にいたる
さゝ風も無うまうけれどみなへくはす東乃
ゆうひ人もくるほとなきうらき給んみしくめて
所しろらは人もしいふをこそ菊のれ
うかふ気り終へきかまどふみかへしもまたでくら
しらずさらまへしかうはてて源ありき終へ中宮乃
おほん人よいはさらへわかゝせら忠見葉にかくし
霧うしも宮かん人とう葉もしけまさまよよ

源氏のきみのよきの御かたちにまぎれて中将は見え
ずやは戸のわきにたちまじりて人はおりて給
うちそいつつさはめんりやうのかはらけ人々の
そそのかせ給ひしかどもこの給ふ様ひとつづらそ中
なる夏の女房のうへにかかりけるが紐まさぐり
ちらしつる給つつしれさせ給ふのみ心ちよげなる風乃
さわぎたちければあがりてつま戸ひきたてたるは
大臣よりかきのとまる風乃とも
しきおひろげてむつましく
御かたはらへとよりつと思ひわたしけるに御そを
ぐして御まへかけたる見給ふ

源入道て恥をつけても島のすぢをもつて守
え給へハいふそと思ひあへる事ふかき心を給ひつゝ
泪をおさへつゝきおさなきやうにてかうつゝ
かくおや中将いふそはじめてみえてしまらせて申
丁ひきあげ給へハかくれも源ト云トおやこのやすからう
かくふところのあれをもちてかくへき給ふとめと
まゐのこすことこそことさらなかりしも行つまれど
しおなこころそちかくとのしかゝる御母
をいともつきさけしさなくきすがやうなる
さ海てかゝり行つハ御返しこれみてあ
御返りかう事かともおもひてまのつくしけれハ 葉ノ上

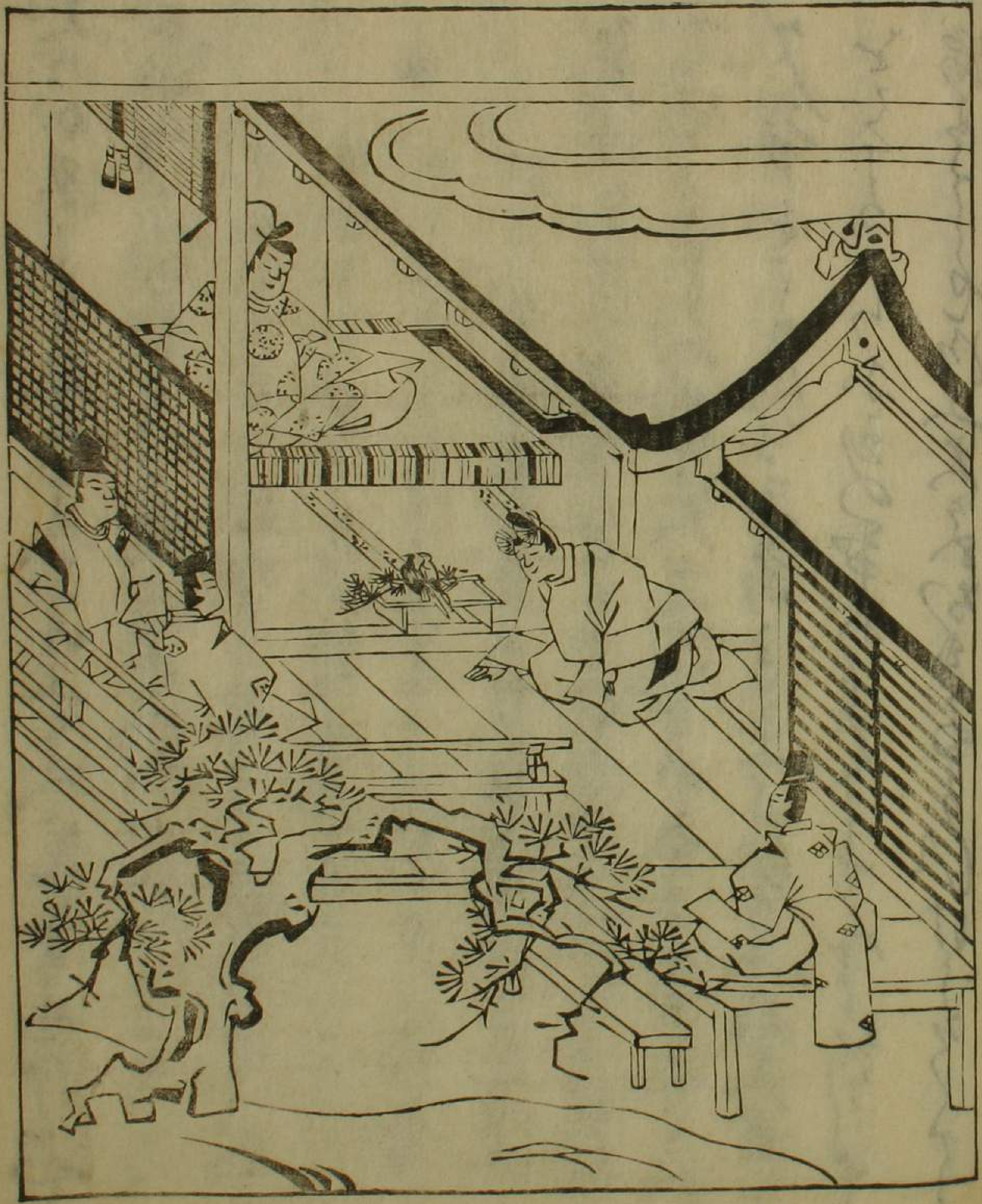
まハさとりされどみかみ念ぜられし海ハあらかし
めべくそれもいまだ山上まの嵐こうれからうつ富
かくまうゝかたへでしておもらる　むかう
かきみなる風乃音しおよびきこゆへし
主まゝしめへきかかうして十年

源
下者かりなくもしもハかとゝまへし
あくき恥しハ主かまさしまし
無のけるへまかり給ねびかり申へよあまる
しておびつゝ嵐とわさひきかけて海さくり
きよろきめとひきちりし給ひ姫君のれ
かゝる御事給へハ恥をとゞませかて嵐のれ

かくしおくしまさとめのとやすく身すまとこひて
平井の唐人の作文かせ給ふ　父君
洩さききむしやしまうしゆふへよも
見まうしまつへわすれましの君
大宮のゆりと兼経へきハよりきわらへまさて
おもさつへて後さうやまうきまさしみつへとも
わらて門のおかしも兼りけれ給へるの作
そてよと姫君の事まさしける　給ふ

行尊　源基平子　[illegible]

むかし僧正てる恵営参議基平たちあかしへ
こゝろしよおりいりのにりまかし志てかけする大峯
峯の山々をてせし給ふ人へかくのぼりてと示寂
ひらうまつるへてろはかの修験業をもみ家
乃おほちと申にあざましにおほえて桂川のりきまて
おもへ事はかれし身を逸かんべらあれいるへきほ
身なる人へのさしそくしとかなり左大臣内大臣
僧正よりむかしけかりて供奉し當いさくうらて
道のうちえんしもうち上皇ハ癖ふかくつれ
その玉かうてみつくのあつさ式但ぞきめてよるい



しきれうらう御あるしへかく見給ふ右馬頭な
あぐるとりてつかまつりまくろくひげくろ
てんつき時源は何後よりまうしれみきくさめと
(源よしあり)まくせ行て亮人への左衛門のざしれ候てきて
(源へ)一えさ殿しせ給ふ
(御)雲上つきなれのあそびしたまひし乃
かすきあくかもけふこたつみよ
(源げんじ)えしおとこゆきつめわかおもくよ
ゑそへりたりあれやなりなん

よの日源よりおくらるゝ人へきまのよそへハ見まほしき給や
みやうへの事ハいまそのゆゑへ　ゆゑしきに
うらきよし給へりせしみゆきてりん
さやうそれひかりやうえし

源
おもひまするひかりハそらにくものをと
かくして見ゆきよめ給きてしきん
まかれかぜの事二つかのとおもひをさいかにつかはよ
又おもひとあきハ大ぐさんぞの名をよりかへ給
夕霧をよろひ三条まてひきし大夫世よ
とそすらふまの事あらしてんとおもひて
源氏もしやか給ひ大夫おもきあるひけるそくり

かくり夕霧と雲井ハすき給内大臣のかんしその文
よの事みなとかくり給ひ源もおくらるのきこえ有
る人ハ内侍の君それをも大夫やすめつくり大夫より
内の君へハ文あまて夕霧と姫君のよめん
とおもひすゝめ参り萩大臣と御上へ
人ハ外五位殿へ上衆の中ゆる毎日おとすよ人
さんへいしおもひく参りてかくしけさひしくあり
昔いまの内々頼しておもの事おのおのし給ひて

内大
おもはれよめつるにも何うそとも何かきしる

源
六条殿にも見ゆきとやすきことかれ給ひ大夫
のかうそしつしも見て給ひへいとおほくせまりて給ひ

ゆきのへくハねよりまさりて御前もかう楽の
ひきてやまうれかぎハ二月十六日三条のとや
ちりゆき侍りけるのこにて文ありハ
かさかさまいひけるゆけハむくしけ
ちりあるままにかけとしくり
林好中よりまきゆきかくまにけるあはの
さらくつかりのたきおもてなるきと忘
つひりおかあいのかきまう一かきれからかう乃
ちりまむきのきてまりえめかかれちの
こころきとおぼここにて文ありハ
わのあしらいきしれけるもありて候

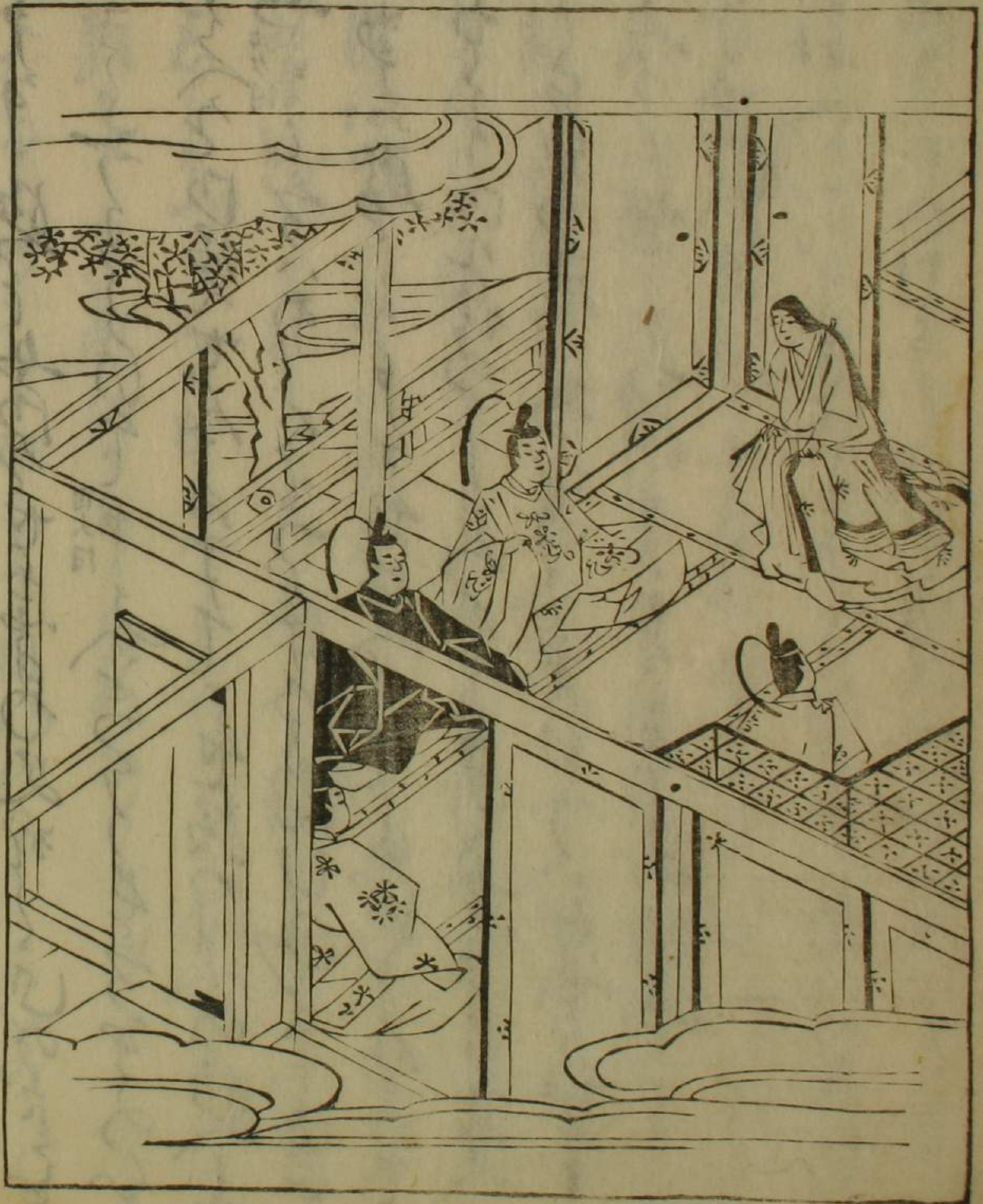
ありたりけりたれすと松人し
源氏のとかしく御山御也しおもせんとく
うらろまた文かうて教子うくらうまも
かくろくもうらうまもたう
御のおもてく気絵ハりけれにうしゆめの猿え来れ
行にれ家ハをとゆめらけ給ひて御名
うらあしや御事御いかかつくまて
いそかくまけるあまのうらつよ
おもて動よかりりて
うら人なきかうなきさくに舟よせて
あまもうけのまくさとしそえて

あまりのけしき人〳〵ハ世見給ふ入給ひて
程なくハいろ〳〵なとしもらひたまひ西国の君達
て女院の御方へ中納言殿なきつゝしのひてあはす
そむき殿ハ源氏中将まゝけ給ふ御うちもとなり
思ひ内侍の御まへにそみやう人〳〵のなき給ふを
きくと女院ともしをかしきハ栢中納言ゆるして
内侍のほとあはれなまめかしき男とひろく
みなおほしけると乃給ふて思ひ給ひて中将の
君ともつくハおほきみせらるゝ人〳〵えたて
打まもまし殿のうちみあなかしくと申す
へきうちにかくりのまゝ内侍のとまハとのれと

やすし給ふと女院をせちにす也又かくしけのそうと
きく打もしのそ中文とつゝもうかきのひ
ひ人〳〵を心得んせんはなすてさせ給ひとの給へし
やまとうハあはくもつけ給ふんせんあくしき
事ハ殿ゝり中させ給へとて女御とすらて
守ゝり此れ此程のしらへてきく女ゝしハ三方へ
くわう也殿ハおもしろつきかうハあなかしこまかに
みつしもをまうけもひさきとの給ふ

螢　源氏七才　八九月　に胡蝶巻の

内侍のかみのけみやつくへのすけむかひなるこゝろを
さわらそてかゝるまことは海もわすれ事はなけれどかく
乃むつかしさげんじへといゝあつかひてよりそれ
なまめかしくわりなりへおとかしおかれて文たとへ
源のかくまで御返事せられしきかくれはそくみな
くるへ給ひ八今しきふこうをあらはけざやき源み
へき事なるおもねどたゞひめてめてまゐらせば
むまおかのまる大文八三月廿日わたれ也源よむも
あひ見よ為つき事おれ中納もきこえ文のめし
こまやかなる御すきにしく内侍の思ひれすら

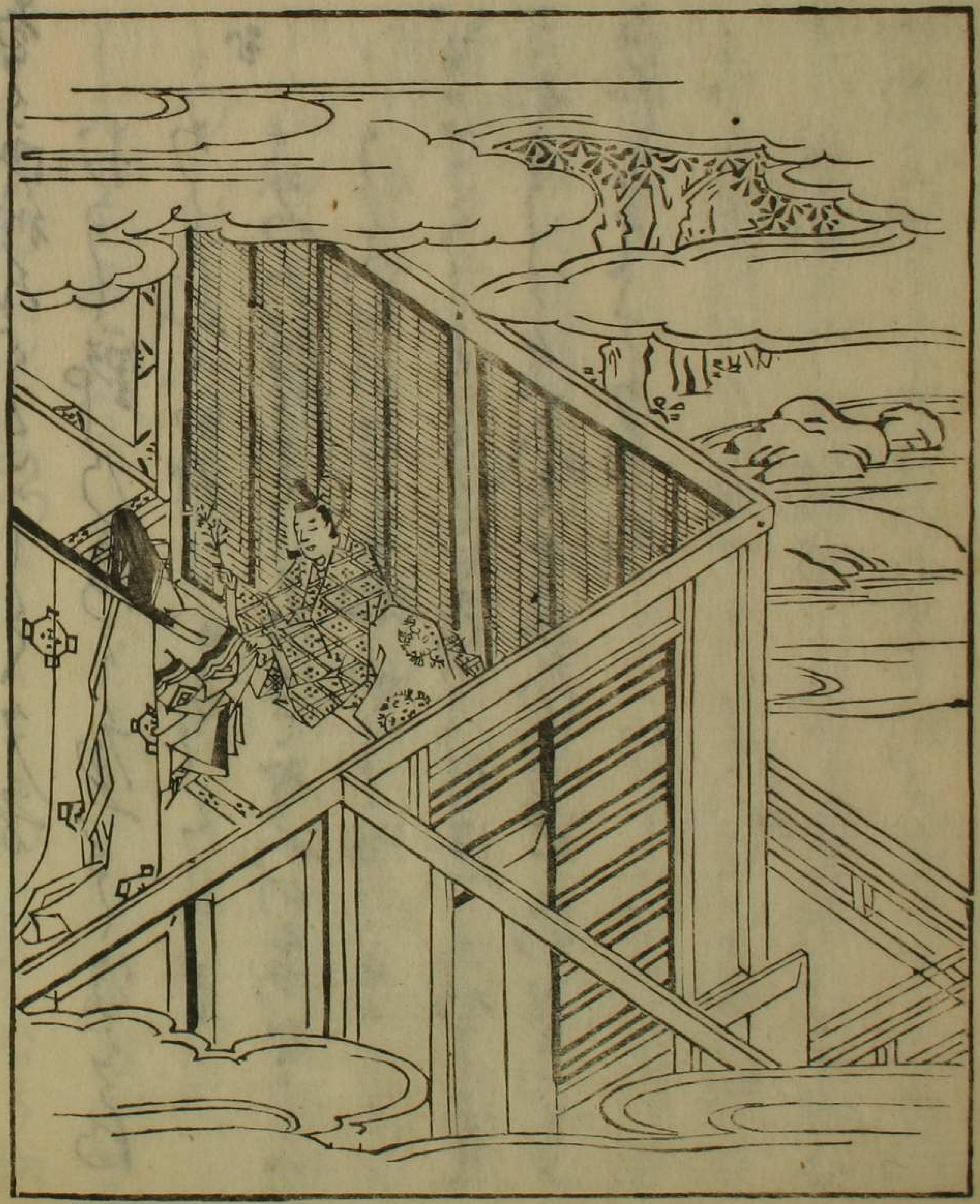


それ侍よかくこゝろ數の心字のひらく〳〵しくおはし
うちはつけても此の難ふみおもしろの心おさなかれ
よかりて枕からめくらきこいて人は(夕顔は)きまうす侍りと
待つる御わたりと寄きゞそへちらうさんつるぞ
こそそれの性めにしろよそことおもりそゝせそこ
とつぎくしうとうつけてさまやうふかすし姫よ
いへ(むかう)姫んよのとなく思ひやうしおなかつらいとらつく
しかづくし月十三日ねがせうへきさ給たびれ
すわうにみとわかるゝに(夕月)あゝうぎよすの冬つく
ともえこそ思ひへるまじけれをの姫はじめてよ
らめの花とみるのつまうさしほと姫へかゝる程

あらは紐をとくこゝろしく夕露
おもふ露乃光やいかに宣へば

む

おそれてかけよかゝせてこそりも
あきのよそおけさ姫への宵なくられ
うさむらさきやかとおもほし
いますかしさきまかりしけまでおやしき
なやましとそへまそ姫の名まきていふくらち
かげきそこら姫の



源の仲宣やすらへて十月ばかりにておほき経を
くらがりしてかやのまへずしてよせなば
行へで吉野の瀧をせんとしけるもかきたまふ
まていとまりけるとて女ばかり中将文おこせける御使
にかく

いもせ山ふかきみちをばたづねずて
よしのがはにこゝろまどひける

む

まことにいるみちとはたづねていもせ山
ふしくぞたまもかゝりし

大将は中務とつかうまつりけるにしもせ経
むかしやつへとものげおぼすはるにそたな

しゐてあまりて大将をえてたゞ大将の御心ざしまむけ
乃かゝたゝかひて宮まゐらするのおやの御心ばへよ
あはれすてゝ年月おほく過させ給はく大将
かたはらいたしいとゞおぼせまし 御身は
いのちおはるかぎりまでとちぎりおき

螢兵部卿の宮

朔日さすがひかりとみても まさる乃
たまゝけれ恋をけふぞあらはさん
まことの心の兄弟兵部卿の宮を
わすれぬ思ひ草子もの心すまゐ
いろまふしていろ彼りせん
兵部卿の宮してむかふ
なりてひかりもまさりひかり
あはれく恋をとのみやえ給

真木柱　源氏七八　以下

髭黒の大将年月おもひまよひかけさせて御娘
まうと人はおもしろきこと人まことはまさること
いまだ様にて宮ひとよふ年を居しの御前
大将は御むかひて源氏の御心ゆかひで父御代ゆゝる
北の方つゐに引ぐしゆくまの家にまいらせんとて

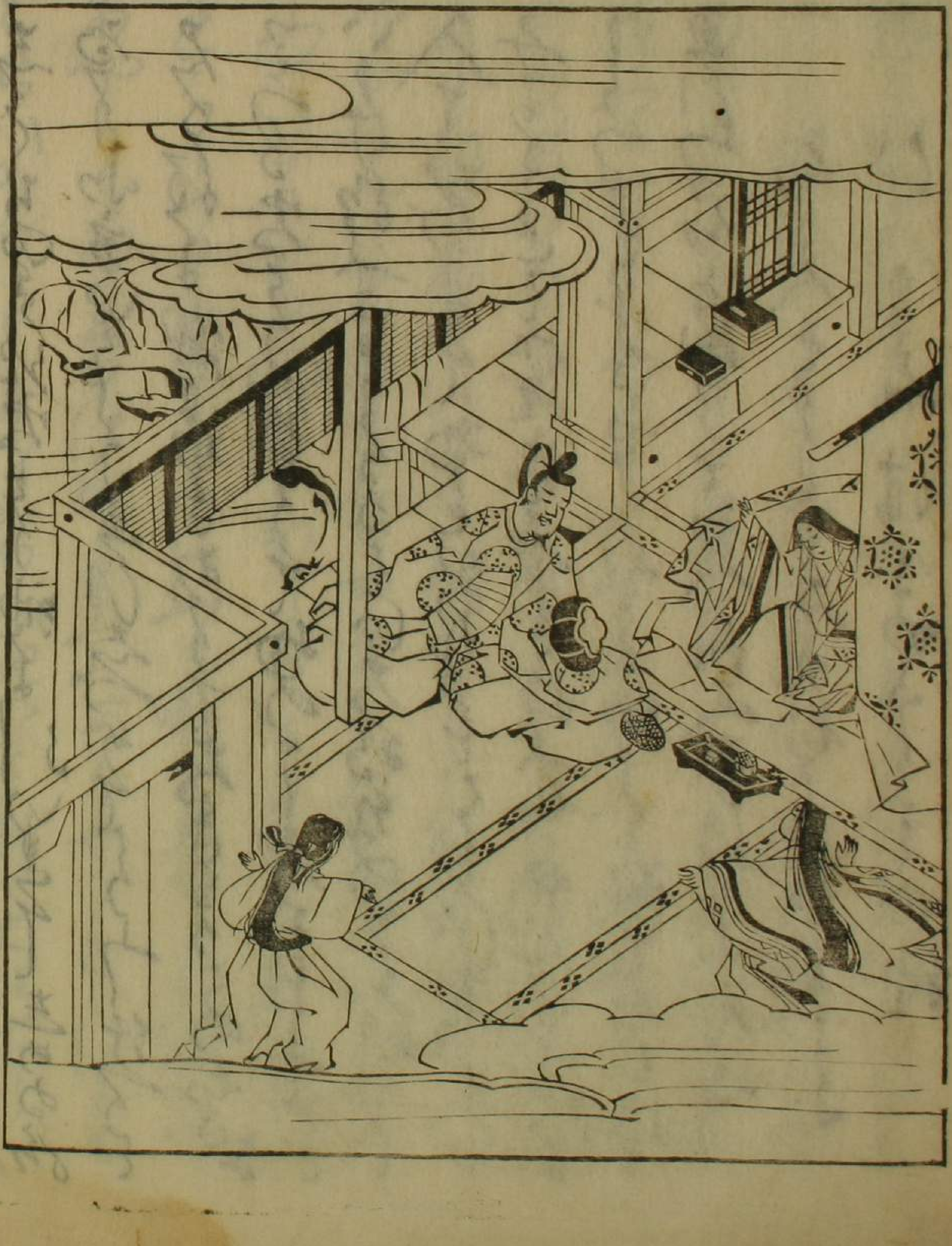
おし太郎ハ親分しやうしまんまんすがいえき姪へ
ご小の方よくも男よまじとんのぶろうさ淀り
まぞろし姪よ露月よハ神まさきたげく内縁而
みを事かりけ此人さつぶし故よ太郎親切く久
うろさせしにまそすしあかりおろすかはかんの君ハ
心つきあすくあかりを太郎のおくせのよひつぱろ源
むろう人ましり姪之ハ大やましげによろ重頼
旭うがせとうしおきおかり姪へりハおうしげよおまや
せうろふすみそひろつもまそにえんまろつまくら
おりしそ源　むハ藤姓く
おりもそくみしえんのまもやそうり

む
人乃をしたちきうらめしきを
うけせ月まろしのまさがよいろくうがね
なろふのみうれあそてきしめん
太郎の小戸ハおほえせしりかろしをかうらも
いくらうしおろしけろがあやしきうねきホ世の
家よそしはたつしひろそうつんあきおりく
あまきハ流あろをあくろえ狂へてけまで太郎の流
んくつうかうをあきかけむろうれ内縁せうト
き流かうらまろつ姪つうがかのうれ又武んて
のえまくしかしてハまうし此人とやくしてを
てかづんかうふまま人まろうてそひとのし

姫君は人きゝおもふ事とて文のあひしと志
つゝいてかへし給はんとの姫君を少将は都の御
かたへとかくみかへしたまはんと思ひさま
姫君はいとゞやましくてつねならぬ少将は家
のうちの者とも大将少将と見しものゝそか
へしかれは葉のまへにかきならひきたりて
でおはしまし事ありませかきられてつかはすに
かくいそぎ人々もいそがしういそぎんと思ひ給ふ
また人々もおもひある姫少将殿と御そて
あやしかる者は姫も心よわくやさしくと思ひけ
と思ひいかゞして姫君は紀の大将殿よ

志てくちのうちに姫君にしり給ひいまそし給ひ
色ふかう少将はしう思ひ志づめてたてまつる
是を姫君は御目にかゝりて大将殿のこのさま
をつくづくとなかめて姫のかほよふしてさと
いづれ姫君にはまゐらせいま大将殿のゆかりも
入ておはしまして姫君をおしたちてひそかに
みつからとも御ぞもぬぎ姫君はかなしひには
うらつまちがひてもわかれは御かたそはれけ
思ひつかれを御もとへかへし文をまゐらせ大将
わか人さうくみそれしをもかる
ひとり人はるかなしこの姫

むかし太政大臣の御むすめおはしましけり
そのころ四十の賀九条の家にてせられける日
めかりひきておもやしけるへゑあへ給そて方
わかのすゑもおもはれなきおもてやせ
ひとりのそこそしるへのこゝろまきるよ
かすひあまりけるのをそえて
たる
うきしまかはらひさつけいさましくしるよ
くゆるけふりをいとしたらそよ
一条のつかさのひめつらしかりしを女方へはやりし
なくしさきけと家の御まこらうとおさへり給へ
大殿はそてもむかしのこゝろまされのおもてなき



ろうゆきを見給ひ母君に一所十三ちうりなと御
二人すんおもしけり父宰相殿をそよのがれん世の
かぎりハおもひきこへづとも殿ぶんとて御よ
中納言侍従國守の猶子として御事三ちうりしてやむ
へよ年ごろけふをかぎりと思へハなき給ふ人々ハ
おのくとなきあへりおとゝ君年三ハ御ともきぬ
て姫君ハそのれよそひなへとし姫君ハ殿のいと
かのしき志行人と見奉りてハいつそなおもんえ
ともする御ことおもふと涙のこほりおち来りて
乃程と人はゆづる例とそ教まそひらふ
多の事にていまそか事そむしられひとれける

そさ御とかぐいのさわしてそさいまいらせ
姫君　とてこそ御とかきねのなくなききつる
ままさ乃くしらいられをかすまるを
母君　なれさしとハおもひかとなきめくらう
とりとまうへききまきゐきうら也
中納言の君　あさけきていまのれハすきそそく
御こゝろまやかけらる人き
もく　ともかくもいろものあはれむとおもま
うけとむへくもおもおもふ世を
御事しりおもへるなまいハいふくえぬと

おのこゞいかくはさくらさらんをなさけ給ふ文字かる
くるしうおもひつゝ大将ハ思ひて思ひもかくとか
うろて若き女御殿より給て姫君の御かと
をかしはおほし我身へとらせ給ひおもしろ君十三ハ
殿上し給ふ次の君ハ八つにて姫君にて候へ
もてなすまゝて此君ハ輦車の宣旨給はり
さる年出てありておほしたゝおもひ玉ハ内侍のかみが
よそへ給ひて第一の姫君東宮へまいりてよはつかさ
此御子あまたの御中にも父ハおほしけさぐみ
たゞうちうせ給ひてたゞ此中ハ上ろうに
ころもけんしかし中宮弘徽殿の女御にて左大臣

の女御にそへ中納言宰相のむすめ二人たてまつりさ
せられけるを蛍兵部卿宮より玉のかつらの
・こと山ぶきをねんごろにかたらひける乃
まことなくねざめさびしき心をおもふか
乃すだれのとまりやすんぐるすく思ひめぐらすに
うへはこちせ給ていとまうけにて思ひ寄事出るぬ
びいろとうちこの給ひせて　御
なさそうくもひおひて紀むらさき给
あらつりつくおもひそめもん
玉の尚侍し三位よかゐるし給ふんや
いきまらん文をまゐらせのちむらさきを

ら給ひしてこれ人をあけまし
大将殿のことを紅梅殿へまいらんとて宰相ちゆうさまし
御　れいよりはやうまゐりてば梅乃花
みぬかうりをみなひおもじとや
玉　ものうりへ風にもつてよ花のえに
うらみし身へきみがひなくとも
右近は玉よつきて大将殿へ参る二月の紅梅院
つまつくあかつ源氏あそわたりたる人文つかは
・かなされてのちゝけさ花の色のり
玉　うつくしさへをいつりさ乃や
ならぬさまる新枕ちつくよ袖ぬれて

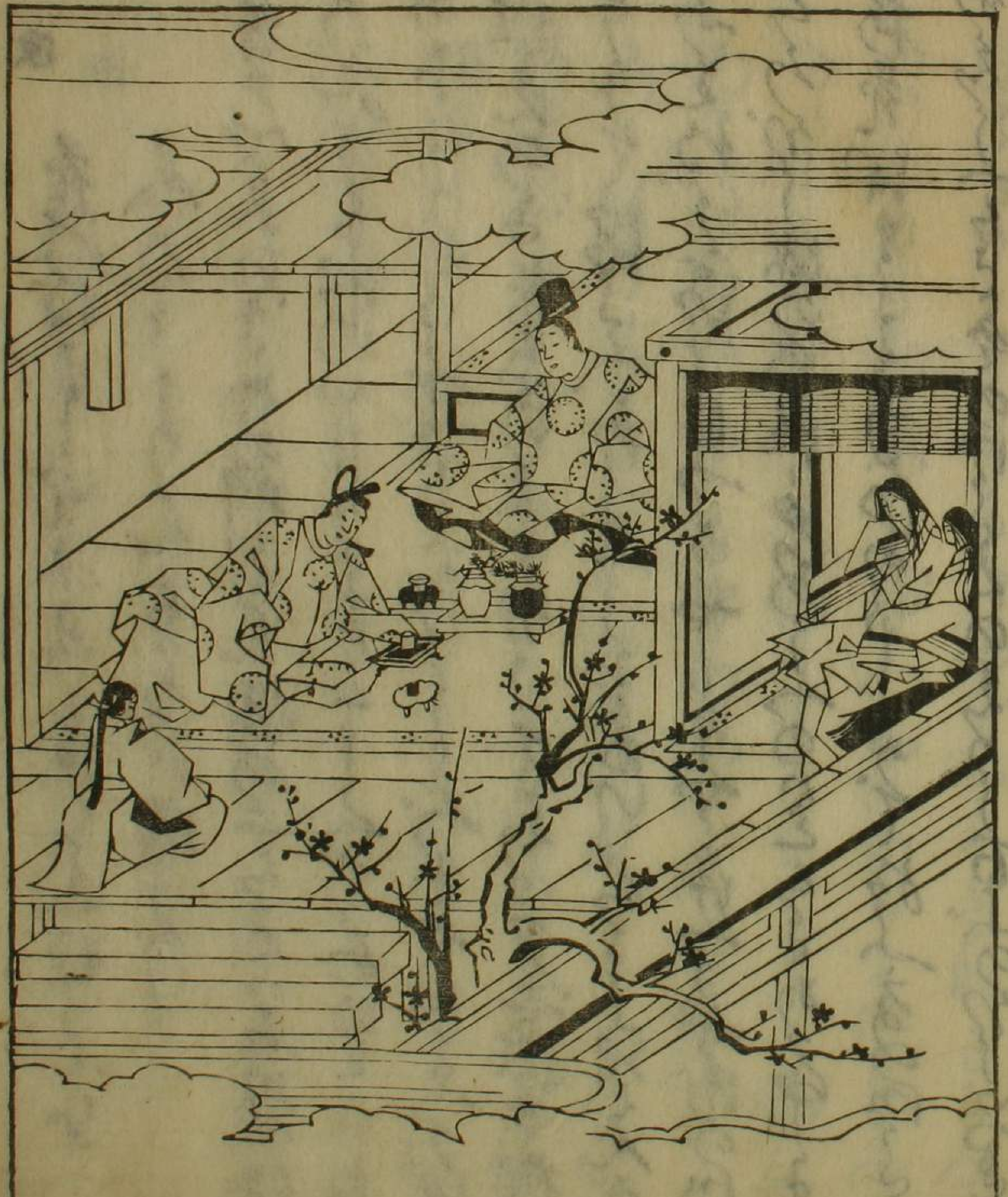
うきかさんへをさそのと行くもへや
落つまつきのおもしろさを見ぬ人よゆけても
・おもひすゝ井てのまつた色と川とを
いそそこうするやまつきの花
野のはおもひの給ひてれ文つゝつと添
おもひまゝかりしかの君をよそれ
いろいろへうそしかさうらん
大ゐ見給へく御めしいかいうして
すゝれてせすゝもあのよかりの手給
い川さまへとうかくとへき
十月とかゝ恋の給文おもく思ふやうを御

すゝせとかしつきまで給ふ文いろいろかりあわれなん
さらへおまき宰相君かしやまのゆうこに寄り也
乃ねさしへて林の中へのこゝろのよは幽君
へうの御給ひしまいけておもふまゝあかりもそれなき
とりいりまいさぐらけよぬかゝそそうりぬさうかう
いきさゆやうまそ夕霧給ひして幽の君
おもい川ぬゝるへおもらふぬくよらく
さらいさしらうんともりそしへよ
ちゃ井伊左衛門を恋みてかなすてのを気・夕霧
よらへなまと中のさつをそかゝへも
おもてかくりいそはられせて

むめかえ
ふちのうらは
わかな上
同下

梅之枝　源氏九才春　以詞と

明石の姫君十二才にならせ給ふの御もぎありて朱雀院
の御子冷泉院の御猶子十三才にて二月に御かう
ぶりの事ありけるにて入内も程なくへきさまや
二条院の御薫物あはせさせ綾錦なとも昔の古
院の御時こま人のたてまつりけるあやひいろなとを調
し御方々へあそばさせ給ひのきてつかひせさを
給ふ書ども昔しのみなつかしくとらなくて
兵部卿の宮これをあはせ給ふ内の御かたまちか
おもしろのなとみつかはしきこえしとりて人敷
よるの御出させしあて黒方侍従合せ参らせはちすのとへ



世の中にきこえさせ給ふ八条のおほいまうちきみとお
はせしかしこのとこにてせうえうせられしをりこれ
くるまにてまゐりたまひざはくせぼんとお堂たてゝ
まつらせ給へりかはりて給ひし二月十日あまりか
あるてあるじのおほいとのゝあかつきて御前
院よりちりすぎたる梅のえだにつけてたてまつる
さんだいは女房のえださしつかはし梅とえて
しもとびかひよりあまりしれたり
新院 花の色はちりにし枝にとまらねど
うつらん袖にあさくしまめや

源

花の枝にいとゞ心をしむるかな
人のとがめん香をばつゝめど

其のち又たき物の判あり 源の二くさハ右近の陣
乃みかハ水のほとりになずらへて西のわたどの
の下よりおつる水のみぎはちかくうづませたまへるを
惟光の子兵衛のぞうほりて参る 夕霧宰相
とりて源へまいらせらるゝ 宮いとくるしき
はんざにもあたり侍るかなとけぶたがり給ふ
梅花紫のうへのはなやかにいまめかしく 夏の御かたハ
かへりて一くさあはせ給へる 冬の御かたハ百ぶの方

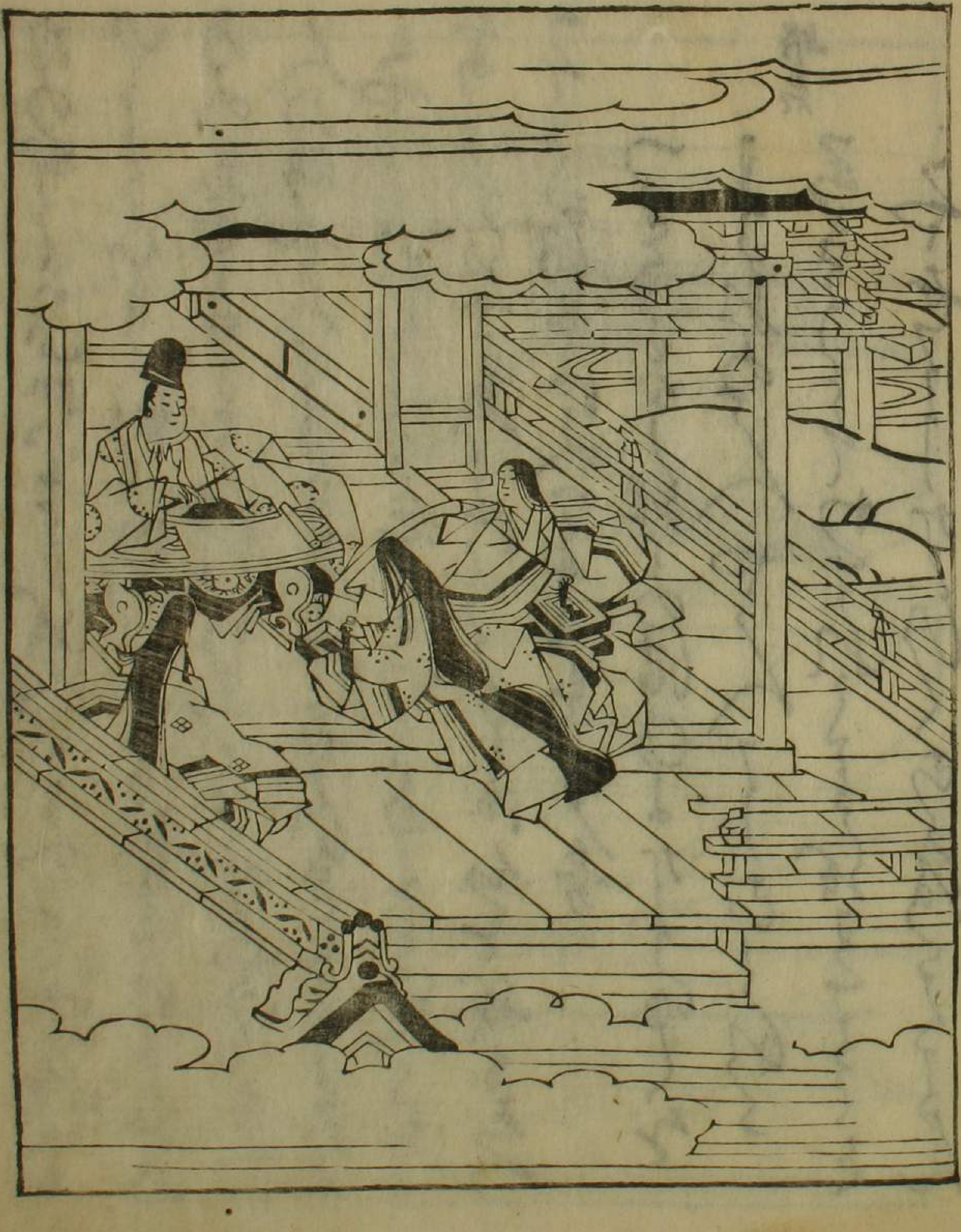
ひとつもすぐれたるにはあらずといへどもさだめかね
かうしきにひとへに薫人々のかをりもかぎりのあ
おもしろきものゝねをたてゝあそび給ふ 宮人
あまりて帝の御まへにて 兵部卿宮ハ琵琶おとゞハさうの御
こと頭中将ハわごん 夕霧宰相ハ横笛 弁の少将
拍子とりて梅かえいだしたる 頭中将ハいかにも
らうらうじかりけり 云々

源
うぐひすのこゑにやいとゞあくがれん
心しめつる花のあたりに

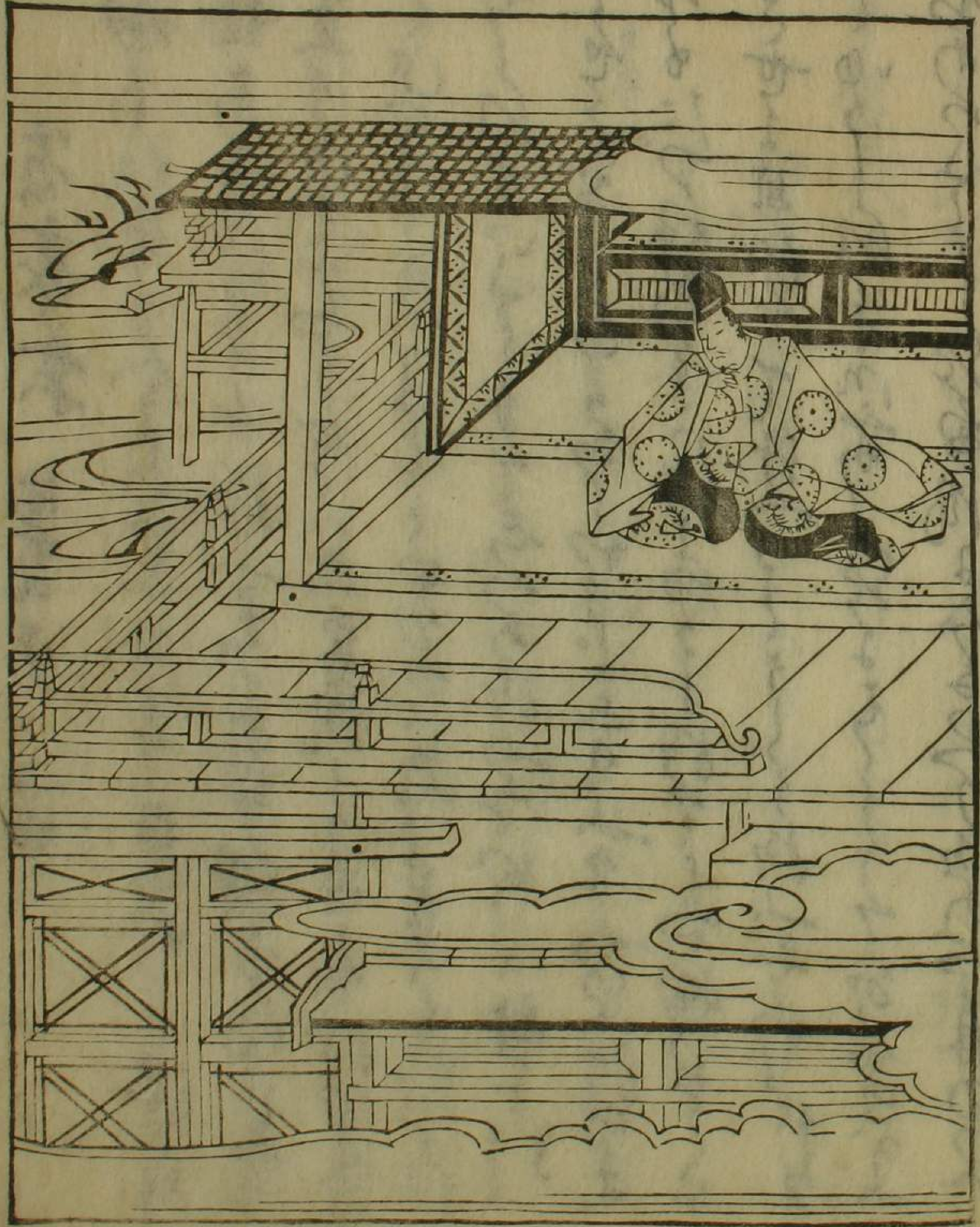
色も香もうつるばかりにこの春は

花さく風に絹かけぬるをおしまん
宰相 鶯の孫くれたるをなくまてそ
なほ紙にかきとゞめしものゝかへ行
左大臣 ありて世のしくめる花乃あたり
とりわけのまゝくるをやまて人き
年有る かすみてふ月と花とを包そすまし
ねてこのゝあをおもうひかまし
宰相の 家のは風にとまりて有るよにのけ
をしたきりの三つ有るせ見えす
花乃色なえての袖かうつりて
おもかやまうといまやえらん

源
おもしろき世をつきせぬ人にもちきそ見ん
花のめしを結きて かへる君
此の時まで桐壺の御かとの源氏なる御かたにかゝりおはげ
乃内侍の気高けにもかしこき事の上は此にて侍り
中宮といひし御方へあり給の時にはに実もなく母御后
の上にはかのかしこき見なき御事をいひしとも
色よき女の御方に脈は母よ日の御方に侍りける
梅がえの左大臣の三君の月に気詰の藤壺殿
とゝもに姫君の御でしたしを祝ししたまへる世継
宰相の中将 笠衆め 中将かみよりおしてゆ急
をかけての遊へはへりしいへども人なりし源にまさん



てんはちうれおりしてゆふの中くぎりさまの
もたびのもやでとのゝしりかきけれは女房
二三人ちかりすゝみすゝせけるぬ人よさう
しおとこ筆のあとりゝへて思ひわづらひける
さゝまわくうつくしかりそうし若んてのまゝなりし
めゝやそてわらり給へりおほしはあれておもしろあ
世の中にはかくとおもひしらぬ上ずれの人よ
もさうべきみちもちつしひてふつねかりせ給ふ



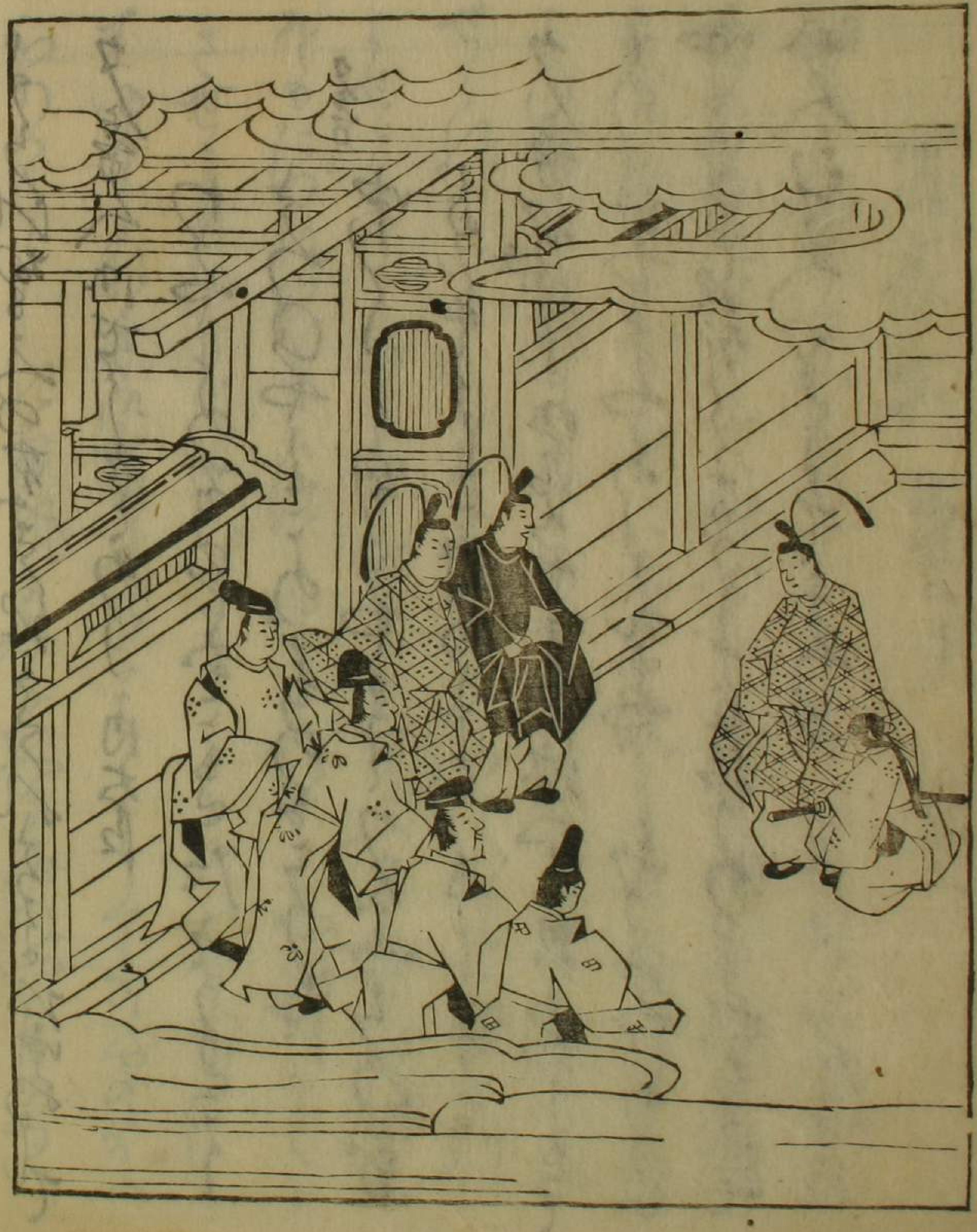
内のおとゝにはさま〳〵人のうへまて思召も
いとうらめしくはらしとおほさは北の
かたの君さうわきたちはひつまくと打まかりの人々に
人乃縁なきをなりしきさみなひきあまりぬと
なりしおりと女房めくらきも紅の御
宿しるしまゝてけうりしけんと我もまつ
まそしお頭をはぬいつらめしきて　女房
つまのさいつきのはめなりゆへを
見すれなへやへりさいぬ
姫君
あきうしてかすれしもしゝすゝくを
ありやすくなひしきもるらん

藤裏葉　源氏の方　心詞

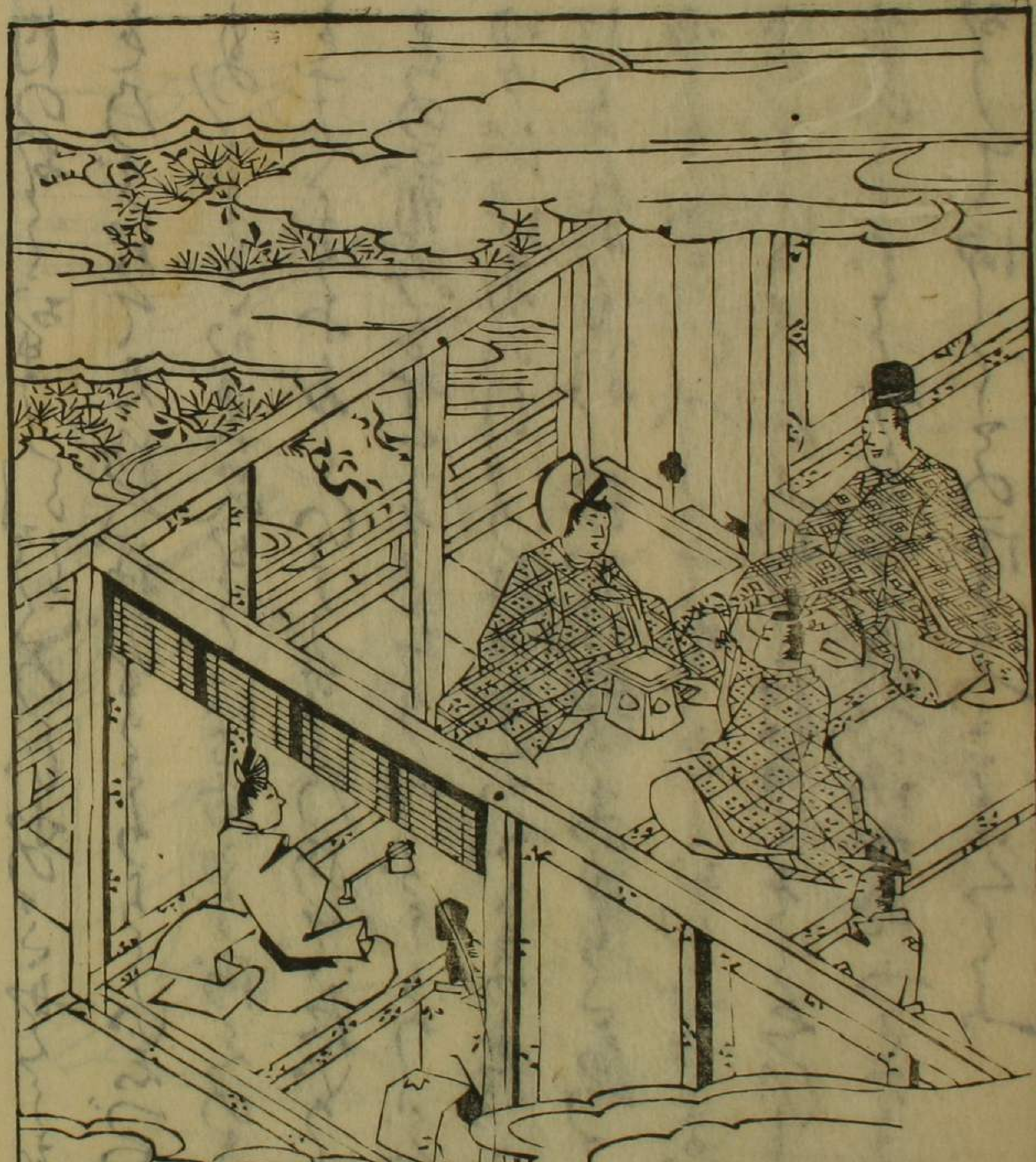
母うへ大宮の御忌日にて内のおとゞ
極楽寺にまうでて頭中将宰相の中将も參り
たまへり御ずきやうは六条院よりもせさせ給ふ夕霧
くじおほしけつゝいとゞおぼしやりてなみだぐみつゝ
せられていとゞもの悲しとおもへる袖をしぼり
よせくるむかしのことなどの御物語のついで
なをたづねおぼさば源氏の御ゆるしもありなん
こゝ世を思ひすて給ひしとて中將のたまふに
てゆるしなされ給はぬにうちとけてかたら
んとおもひしに藤の花ざかりに月のつい

さらば藤の花さかりにまうでさせ給へと頭中将して
夕霧へ仰せごとあり　内大臣
わがやどの藤の色こきたそかれに
たづねやはこぬ春のなごりを
夕霧
中々に折りやまどはん藤の花
たそかれ時のたど〳〵しくは
夕霧おとゞ源氏へ御返事を源氏へ見せまゐらせて
ものがたりやありけんやゝくれて参り給ふ
やがてしつらひなどしてまうで給へば
八人むかへいでまつる

内のおほいまうちぎみは女のつきせぬことを
をのぞみて見給へ給ひてまつらしいとゞつやゝに
あやしきかくさへ文給へにも御きりげのきえ
をすぐさずあはれいとおかしう乃給ひてたまひ
春の花み子打すぐしちりめぐらしあひさか
ゆかしさ君のりたちをふしぎにきこゆる
おぼえあるよしありつゝ多くなさるつれ
ゆかりに志けり下とてかしこしとおもみまゐり
深きそのことしめしおもひ侍りしてそこをひしく
若のしきぶすゞん人給へ御中納言さきなりけん
おもしろくてこのほどきこえつきぬべし



内大臣
むらさきにかことハかけん藤の花
まつよりすきてうれたけれとも
夕霧
いくかへり露けき春をすくしきて
花のひもとくおりにあふらん
柏木
たをやめの袖にまかへる藤の花
みる人からや色もまさらん
七日の夕月夜影ほのかなるに池のかゝみのとかに
すみわたれり松よりかゝれる藤のさかりうつふ
らす弁少将こゑいとなつかしくてあし
かきをうたふけるに大臣へ文をたまへ中将に
夕霧
宰相の君そゝやぬ(?)かし(?)えひ(?)たれ



ゆすゝめりともおさまへはいてゝこひすゝみて
むかしの事まていひ出て入道の御ことを君達か
とおほしてせちに恋てつけ母のたる
あさましうおもひ出しけるにもなみたくらく
いりにししせちのあはれのかきり
夕
かやうにありけるときたのせちに涙くらうの
あやしきのこはおりや作らん
あかきとてはかりしせちに逢すしらす
おもひきつかはるあさいとゝおもね
これらの恨あさうおもかけありし文さへ
夕 うちむかひよそのゆうきをもて申し

夕つかたの神の恵ぬを
おもはかりては文をみる神さりし事のおもしろき
ふかくして夕霧にけさいつか文をとものつやと
乃ち又くらんかりいそて参りて導師をそえて
日高そはしくらやうへおもして四条へ行り
御心のうみをほよましてはうそて御車出くるを
て事もそへさらしもけらいのこえ涼しうまつる風の
使まいして御くかさせたるの女御ゆかし給はぬ
し侍を恭しく御女の供して夕霧ははかなき
乃希しちつけひとつりつ夕霧
なからやけのかすしよ かはりける

若内侍

おもひくまそりけりふかくかれて

かくしてもかいふ人ゝ草乃かれハ

・うきおもひし人やまさるらん

入内の事ハ家のとをく気給ひうるをもてまつ

てさせ給人ハ明石のとうらかうりて家の子家隷

のことを明石の上をたいめんありて折をすくし給ひまして

うれしき事そのうちまとやとまつりし此御

女のほり御姫君の御かたらひてけよひいまの

たち給ふ明石の上ハ宮のりちらして見あつりにハ此の御

ましみはひとつ御そみてまつりけるまとしに住吉の

神もまうて給ふと思ひ立ける源ハあけん年しもて

おほよそ内裏の事おほしやけりにちかあかりさき

世のいきききこえをたまとにすけなく住え

ゆてみ給ひらりて内大臣ハ太政大臣夕霧方ハ中

納言に成上り給ふのちに住まいせと殊ふやきし

事おもひくおほしけれて藤の花のさかりにおり

らせて中納言

あさみとりわかはの菊を露にても

こきむらさきの色とかけきや

めのと

二葉よりなたゝるそのゝきくなれは

あさきいろわく露もなかりき

夕霧方ハ初ゝ一所もすゝめんゝと合せけるとハ三条殿

のあはれなりける事してわすれかたうちいさき
おもしろげさうげなる昔かたりしてあかれぬ
御つゝ海なるにすまゐと久常
なれしそいふ宗のありしに人乃
ゆくえいしるや富のましけり
世にも大ふくのしなあはれしく
なき人のかけにみえてつれなくそ
うらやましくいさしら井乃ふ
又御ころの中より出て平家のかゝなしかる
されとてもうれしきことのかなしき
ころ乃うちしく　かしく

扨そのうらみなる身はむへしくらあかしかん
うへしかに松もうけあいのときり
あきいりまきにもうけてそなのむかしより
ねさしかるそる松乃とえし
弥生十日井のおもての六条院ま冷泉おあり
平家けしあそたびよて朱雀院ふもむまつの殿
またそのつきの小島ひきなりへて五月の廿らま
おやあらみそひつくる程に前のえんでんり
うつかもしかすなのほそり猪とえまに海と
志きこぜんよりひきし東の池にふねをうけさせ雨
乃らかひのおさ院の輪らひきしへてかろうせ

行ありちひさき亭もくひの山のあまいそと
ぞとしねど秋の四方れハいもしめりと中みらしの
かべとらず中門とひきて御覧せさせと御に
たち給ひしそれてあかしれはさやくまうと室
かありてあ御させ玉ふ池の泉とたの御おそり
殿人所の庭うしハ小形としかりつつまつ馬
一両うしれを左のとりけて共ぜでんのひし
よりおそれらし此左右りのぎ御つきてそうとお
うきておきらおもせず御しそてにしておもとのり
まいる事かの行よ殿上のとらしの筆つくまつり
御主恩をうけまつり行よおもてあもし此御子十

えいりあるおりしろつきまふみうとれそ御心おしお
つきてふさはし殿おなりれ御酒御おりあお
文まるきまうきのきくもおわりう
御とうかけし杯をとらふ
太政大臣下
むしきめのゐよまつろこきくおれ
みこりつきさ世乃行しうらえけ
かうおりしきやとくべ家のあるあまたあつき
まとつどもすもし気げぞやきてこづひらいで
うれ宗しきぬさせてみつうきおもたぬまれ
てあ御のうけていつ経日の事ろもおしけし

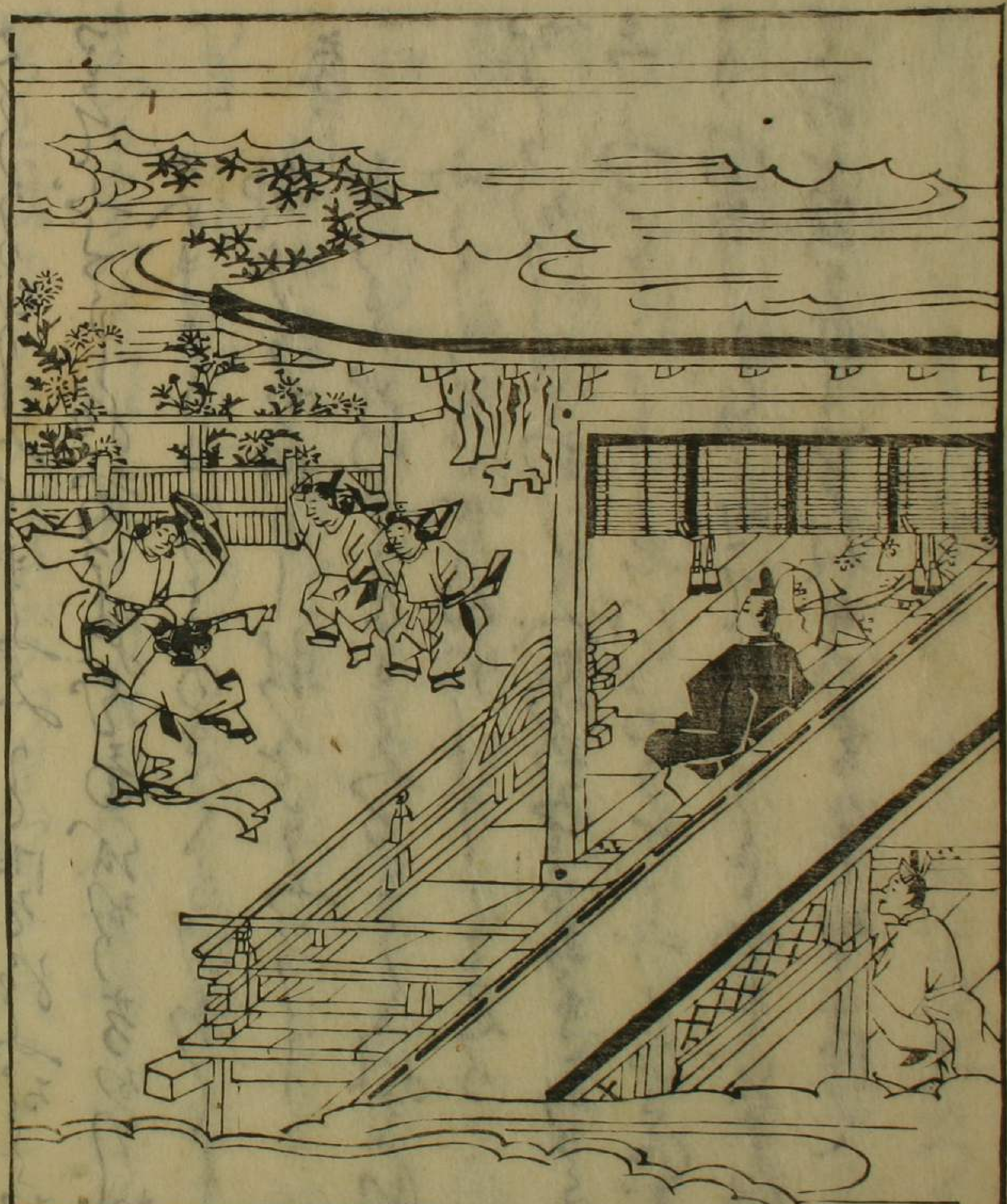
秋をへて時雨ふりぬる里人もかゝるもみぢのをりをこそ見ね

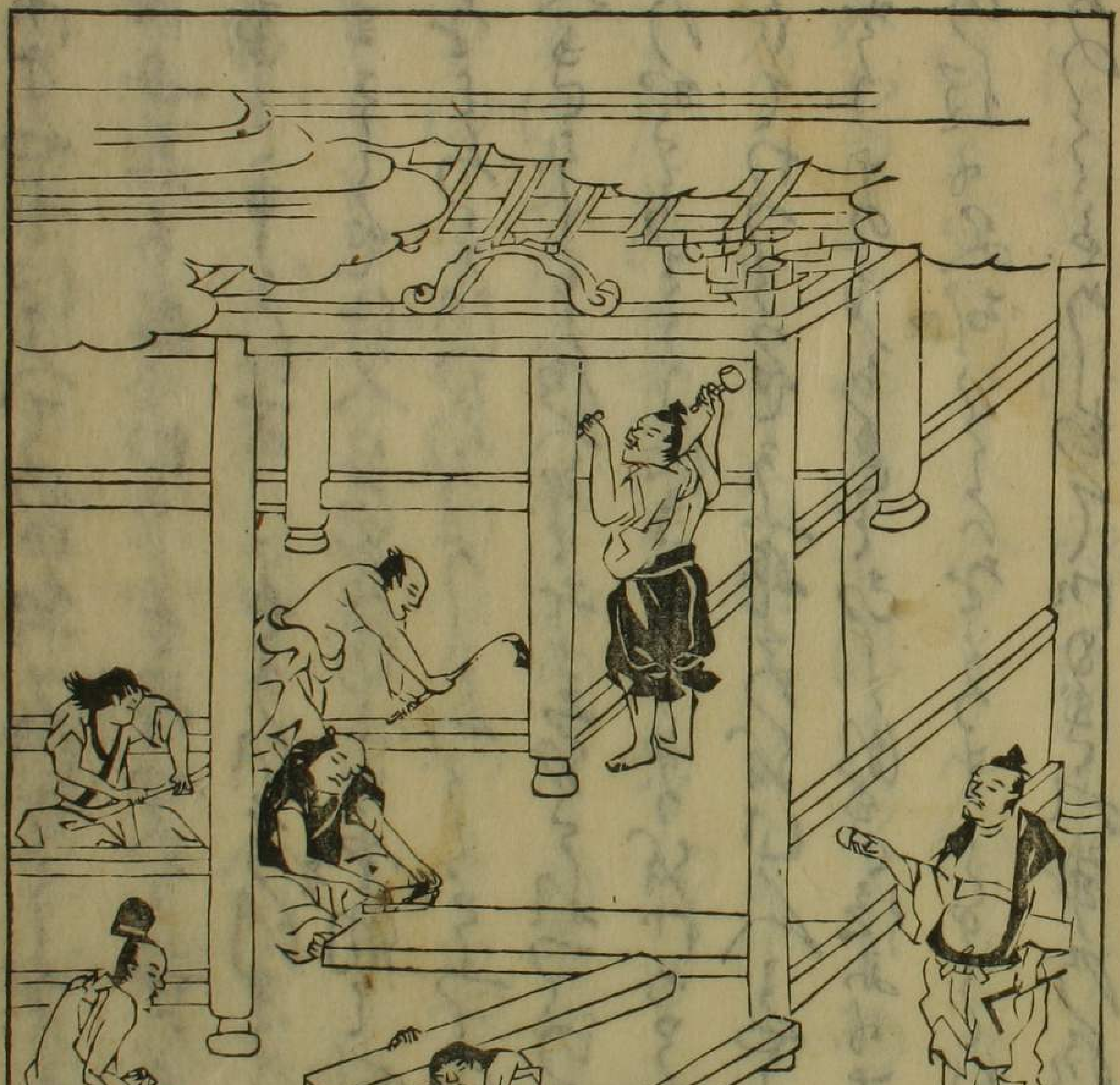
よのつねのもみぢとやみるいにしへ乃ためしにひけるにはのにしきを

[illegible]

若菜上　源氏の三十九より四十一まで

朱雀院ハありし御幸の後なやましくおほしやゝせ給ひ出家の御心ざしあれど[illegible]の御事を[illegible]





かりつら所とてかゝる所にもすゝやかあらん文
さらへ来るあ御ときまりて女文字おりしまします
中にも昔つかれ代の御時の女三のあ御かゝりし比御よかつ
つき中のこ御子御年十七にてたりにおりゝす世にて
むきこ山藤しゆふ後たまへ給ふのむかけよめのへ
ゆらんと解くなうしろめたくおかしきすげくれたら
あれでうどうもちかさめさのかまえてあらば御
くらにまゝしまいやゆふあらすにの御寺つくりてく
けうやもゆうんの御いきさし

はたやくにはへてのけんはつしきさくりて其文を
は母兼高殿もわりしも姫君文のへ世をたのみ給へん
事ごもしにすしきやうひ第のまくよさく殿
まさしも行人ハ六条院より中納言は君よりうら
をもうひなりのしきつくるうはまの姫上
へきらしや姫へ御と井吉殿されつの姫君名寄
のかくさうしにきよしまう姫ごめこう来てこの
もそかつりやも上姫君のはは人へまやとありける
きりまのとかまでむよ姫き位めもすきぶげん
の猶も又おもいをさろまし中にありしめさる
めのくをめしあてはなぎぬ事乃姫にまいつの
て

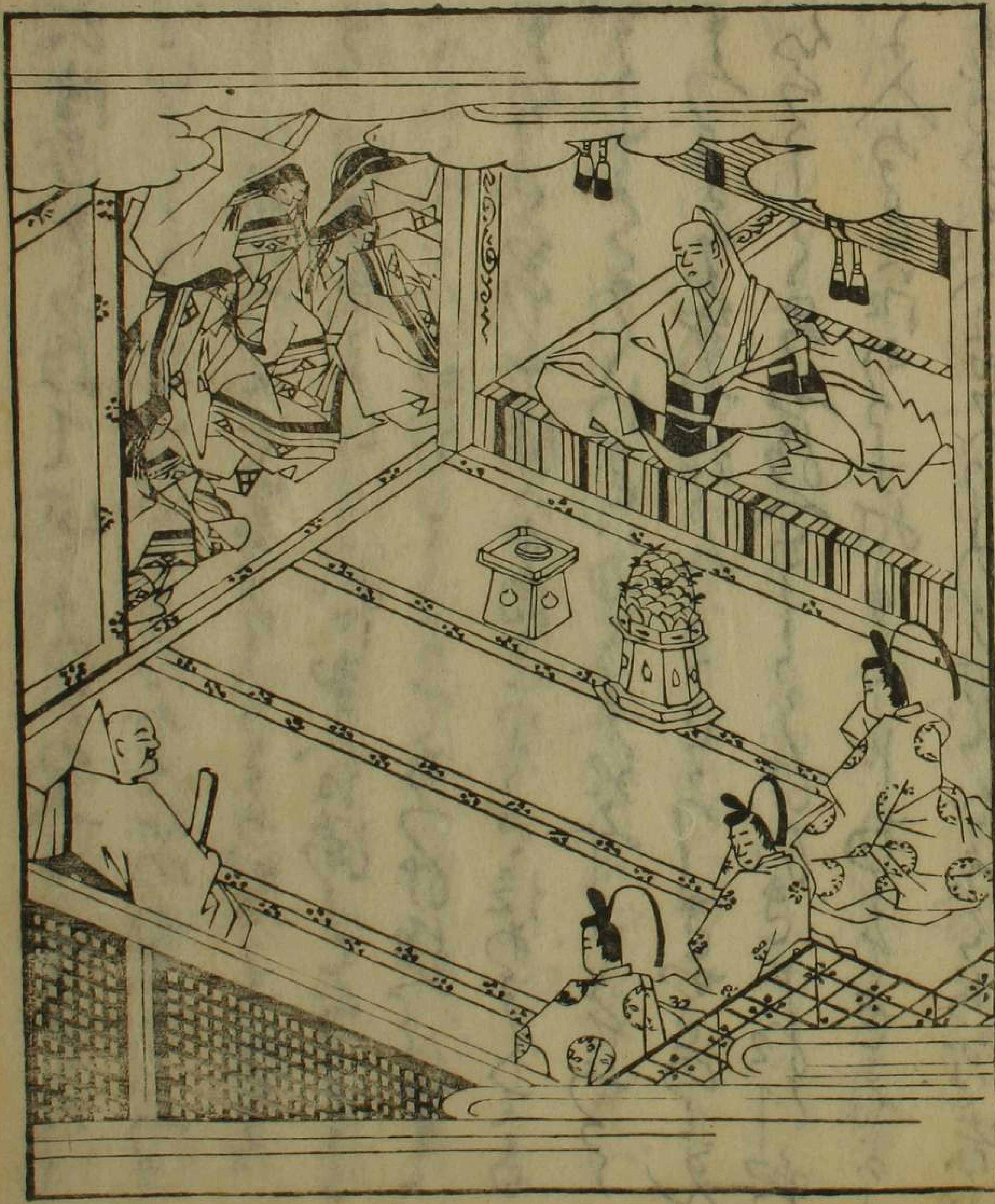
六條の都の君の物のむすめ都みつさそかんやう
まし出ゑお給あづりそぐまん人へ中ると内上へ枝形中
文女君さらもやんしなきかぎり女とせゆるふ
ちろくしたうしろつとなくそまいらひとせく
なうまんめのこ女房これハ名寄御やしまれどお
さゞにあつけ中すそてべあまりのゆにかづいて
めざ御つき思ひハおもしもやうそ御やご殿まてめや
をうすん上つりやのあるげしもハうしろめたさはれ
どいろゝあ世のわひさハ殿人のあいしとかれらう
せまのありしされまれ女おくハるかいてうて中宮
らまむつびつかなし母のあざむしまんへさて

ちかきやその後ハためのとのせうと左中弁源なも
ひろもんしやつりまつりしめれともかく腹学
しきありと陸にありし給へとかゝこみれ
うちそのきむつておまつはまできの子まてぬ
くさおやの君はあつめしづまし人のむすめあた
こたなくじしくたれつきちのすきしめのかはふ
みとうちおやのおりてかせうけとそづしむる
あぐれはあつかくもきをきたへき人のひとよゆ
御きこうまつりて世中のなほすにすくせしくよ
ては世よとさる人あつしのこうつぬれおやもちらい
なかうら人もゆかきのよんひつるみ世ひきさちお

しさうせん女のきざしおもひも雷公かんつかうひよ
しあれそのきみきそれより大臣この御子の
あつさのきむハおほあやうき事もハあされどを
しまへてうきつかさ御しくさんあへき梅毒房
むねさ年わくてもむげよかうびより六条院より
しそおやゝかゝ御しゆづりやすきせめて兵家にあ
まして新院の御世の御ありさまもそこはの又いく
ださたちさされあるへしとそうきれをしろそとへ
うけうりきてそん出しこ世はさうせんかさそい
らくしそづしにすんかへき中納言かどへうく
しさやうあまでゆきさいとくてへずうも流

めでたかりけれはしらぬまゝにめの人きさいはさる
きこえてまゐらせてきつるはおはしますほどは御
なからへ御年もおとろへつゝ河くちの御わかれ
あはれてらくにおほしさらふかき御なやみにくるしく
御かたちはいとゞ流させ給ひ折ふしにつけてさしくも次内になえ
てまつるへしおほしてそれはなりかへきものは
あはれて右院の御時に大后めいきまさりぬれはとて
すさへて朱雀院へ入道の宮のあねにはまさりて
きこし女三の宮の御母は入道の宮の御はらから
うらみのほかにかゝりきこえしとも心よはしく
しかいひつゝけても此御かたへなほきこえ

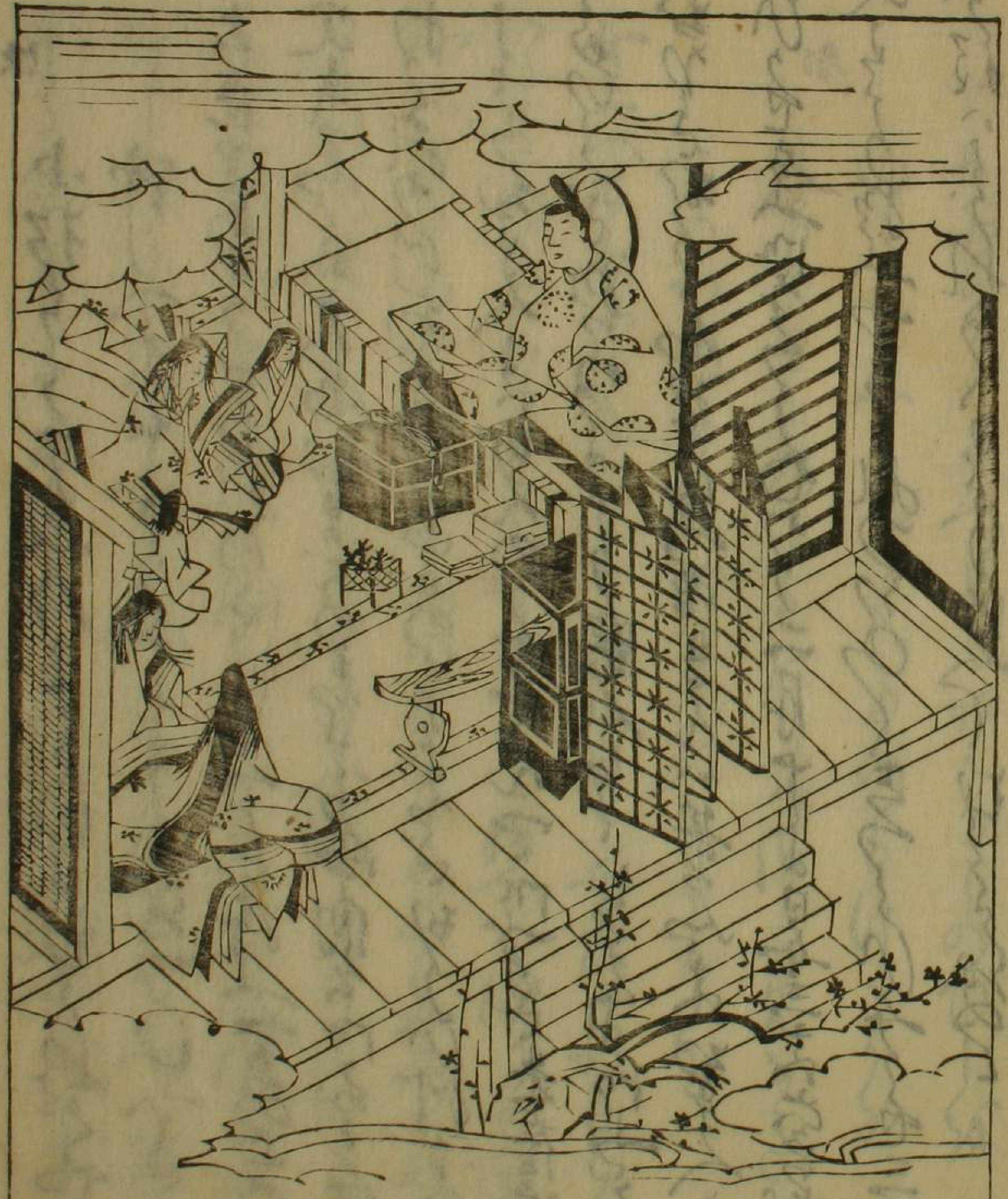
まいらせてとおほしゝ年も暮ぬ女三の宮の御もぎ
の事せんとおほして御帳のしつらひめでたう
の后の御かたぎりおほしやりてかやうの事の人
多かれとこゝにはおほしきたる大后の上達部
みこたち八人殿上人さらなり内春宮
殿上人のこらすいかめしき御いそぎのひゞき
まゐるもの人かずのうちなとはたてまつるや秋好中
宮よりもさうぞく昔入道の宮の御時のくし
のはこおほしくあらためくはへてなるへきを
中宮 さしながらむかしをいまにつたふれて
玉のをぐしぞかみさびにける



院の御使しつけてありけれはおかしかりける
さしつきたるみちのくにかりけれと
みなけれはくしを見ことをさしつるまて
されはなきに三日ありしてつゐにはれなりし
おはしの内侍のくんのあへいいさすひてかく思ひ
きこえつる後ほいく人もおりあそて心
きこえし山の座主につむ事もおほかりき人の
かくれてまかりし女御の家おもむき女房
たちもゆかしみえてなむいとしもし

六條院にも聞給て、いとゞ御心のうちくるしう
とかくして見給へれば御かたちのあはれさいとゞ
しく思給へらるゝかたもなくあはれなりと
院は此日親王にもつれぐ事にてなく思給ふところ
へき御みづからさまあてなる御けしきにてよし
なりしを源は中納言をやさしく給はらてゐ
どうするわざは心もとなくそへてつく
まうさる事やかたくとどうかせ給さのこえ
なかりし思給へかくしけるひきかはし給
に入の君は御あはれすさましきさまをてせさせ給ふ
院の御まへにもせんかくのけしきなれはとかく皆

かくれて年月を過給て、院はけふの宮にはこ
はれらけりてかきくもりやましくおもほされ
此文の御かすかしかぶらつかれやそくしかりて文
の日葉のこと女御給やすしくて院のたのむけすく
御後もとされとも其の年にて女三の宮御かすそか
ならぬの給そえいかりひとなうしてろなて
人はいかうさんけれらいかうつかひ給へん給すらぬ
見ても年まかりいとしき事ありけれたかくもたかる
事はる宮にも御なかさ給ての給へりか
すさんいと葉はかき御けしきはおもと年たるりる
朱雀院には姫宮六條院よりつかひ給へんやいまき



源氏しゞふの御賀ハ正月廿三日ねのひなるに
左大将の北方わかなまいらせ給ふ玉かつら尚侍
南のおとゞのにしのはなちいてにおましをよそふ
かべしろ御ちやうきちやうまてはれ〳〵しく
みえ給ふ二ところひいなのやうにてかんふよく
かうごのうちにまゐるものゝかたちをみれは
しゐのつゝみにて御子あまたおはしましたかつき
かんの君のおほえあまねくおもほえける御もてなし
のうつくしさにてけふこそのこりなくいつくしうなり
たまふを

玉 わかはさす野辺乃小松をひきつれて
もとのいはねをいのるけふかな

源

小松ゟ十六乃よるひるもれなくや
野へまかりてそこしかつ山へき
よ経者めまつこ自れひさしまつさ給ふ一葉の上乃
又我かみ文大将むまごの君ちゝ中宮の御かたけ
わか氏み川御まへおりのしるさがかりひ川まの
しきらおほ人へまいりんのうけじんてれつき朱雀院
もりしぎ給子のよしう紫人へかいめすゐんへ
おほきかくか祝を遣悲きんい若人文観ま人へよ
ひうせ文れまうもあり二月十よ日女三宮六条院
へまう給へむかられつきてまうひみとせ三日
が程ハらなくまう行て出ぬるのと

源

ちかひくらつまでかくるよの中に
ゆくすゑそくらめのとけるらむ
命とそゆくをたしめ何とかるさ
よのつねなるもれらりを
女三宮へ御み舞ゑやうり給ふと葉の上かさしう
ほかきわざうかをいすし給へと関りみ源の
女らうちら中務中将の君なとかくせつあま
すも給のれおり御かりのみ源ハ若すしおもろ
こもておほひ宮ハさし給ひうちに柴の所その内
かくしおりて北の方へそつねとして陶
まる也宮ひてあけかり上の所ぞうしかりなし

給ふ後ひさしくしてまいらせ給ふこゝろ也
し源氏之その日ハ女三へ御文つかハさる 源
まいらせと思ふうち程ハなけきとも
うらうらくしけきのおもて也
横ふよけ給ふは紫へ何にてかそ給ひて
女三の御返しまつる 其文に
うれしてうちのさしはさみへき
見しなたゝよ是のおもて也
けふハむらやかり給ひ女三御ゆるしもさされ給ふ
てる御心の御みきをひせめからしてうらむ
さ御し給ふ院の御事にて二月十日 梅の御事ふか

ちゝ宮の六条院へ小紫の上へ小院よりれせられこあり
えむきにけり世のおもふ給ふを
いかにもそれかゝしなりけれ
紫上 えりしものし給ふくはしかゝさ
かくし給ふにてかけまちかれそ
女御文なとを見つかはしそ上小紫よりて
うんなりける御かたのかんの君ハ三条の宮に住
院ハ朧月夜とはかんの君なれハかゝりなから
源おもひ給ふかりて昔の中納言の君を
せしとれいつものことしてせしそこの君のひ紫の
よるへかゝのおもひてやうらてしのひてかんの

まへひきしおくりける　源

年月をかさねておつかれ

さもせきかなしおつるなみた

（紫の上）なからへのこせさらめかすは清かりて

ゆきさおくらんやくるしまさ

日さし高く積もおもふて花の花とかはそて

源

三河ともわかれぬりの浮ふりすまふ

身もなけれへき峯の花のと

（花の上）身ハ絹うけんうちまとのうちすそ

かけしや河ここうすまのかさ

家のはら明石の姫君て明さを源く

女三の宮しまして乃もしれうさきらひきう

すこしも明石のことは心ならされおハいまゐらす

かしこまりくせて花のゝ上は姫君へさらはれ

つれて女三の宮たいそう日まてやまと心へ

らひと源ハ紫を行てたのしはまうけ

身もろく萩やさゝみんまうりて

あそとのふとかるのとまり

水鳥のあはらは家もかかりぬを

源

萩のこゝしき家しきしめま

明石の姫君ハさらされ中嫁らるたのともめま

したのゝ宮を行て申れ方あけて女三の宮また

いろし姫ハ女三の御母と成んでとハ御ちうかうおもハ
いさこへ中納言ぬのしもめかうて深草少将ハ
御顔とつけて見まもみへけまでいまひや姫ハ
志きみの井のかほり精好中衣なかしなれ京乃
七大寺にれどもやう布で子だん山家の字寺
こきの雪百之とわらそせきを姫ハ夕霧中納言
左大将とあをや行て滝もいと切たくおもへまし
てれ流きつき姫ハまんざらく笑ま思まいて
けつのきやうもしれ馬字之六来并のあん人
引その子がう時も花らうハまそれ事あちい
しあせどけ夕霧大将の喜れ御中りしいとらくかど

まへりおうて姫君ハ二月ちうりの御前さかハ
ろうてなやさ給へて小乃町の中のぬいはわうした
てまつりけれどおれげんざ九のちうあまき君いとめでたく
ききんまうまかに
おひのあさかひのあうさにたちいそて
しかうてわまいかぬれハこゝろめん
姫君
さうかうてあまとおみちの志る人まよく
うみも見えやうう乃こまねを
明石の上
世をそてわりしれぬるすむ人を
うらみのやさいきうけしもせし
三月の十よ日の夜まおいさ君まれの子[illegible]のと

おやめでたかりけれとていふことかぎりなく
まもりありて明くれの上はれゆゞしのあつかひなされ
つかまつり給ふ七その御は内よりはこのみ給ひ
の事あそばされ大臣わたりしくときゝ給
つかまつり東のはあまがつてつかまつりおほせ
をいとをかしく

はかなの入道つくへすてとめんは世の作りひとを
めしうへきとおもはいひてあそをハ寺よ遣し
あまり国ハ寺の事よ志をとさて山寺のおくの郡
よ人つよ以の山のつ紀年ころ志やとさ以ん公の上
へ又どまれる八よ文よ八なる万のしらてひとむし
姫君の生まれ給ふ年の二月の末よすてし山を
ちのあふきけ山乃たちより月日のひかりさやう
よさしあて世をそてそうつ八山の志りのび
よかられてもいうわさてと山とハ広き海
みうへちいさ記めしのつてあかき給さして
ゆくまん公し思のびく国の女と出るへハ

住吉の明神をちうしあ祝よあらてし給へ拝ハ此思
うすひあまし八十万億の国へふてうれ不の上へちい
乃そこうくういます
ひかりいそんれつきちうくなうにう
いまみせたつしよの夢かうりする
さて月日かきうり今とうん日も所よ給ひまこ
しかうて菊の山を通つまつてゐんけの
あことおつりしてくだれすとつら給へ後の
をのゆかん給ひんよあう新文まハちんのとつよ
出んじらあて来経つる鬼へハ此有の生うる夢あ
唐まうりをあれてかつきしいり重か

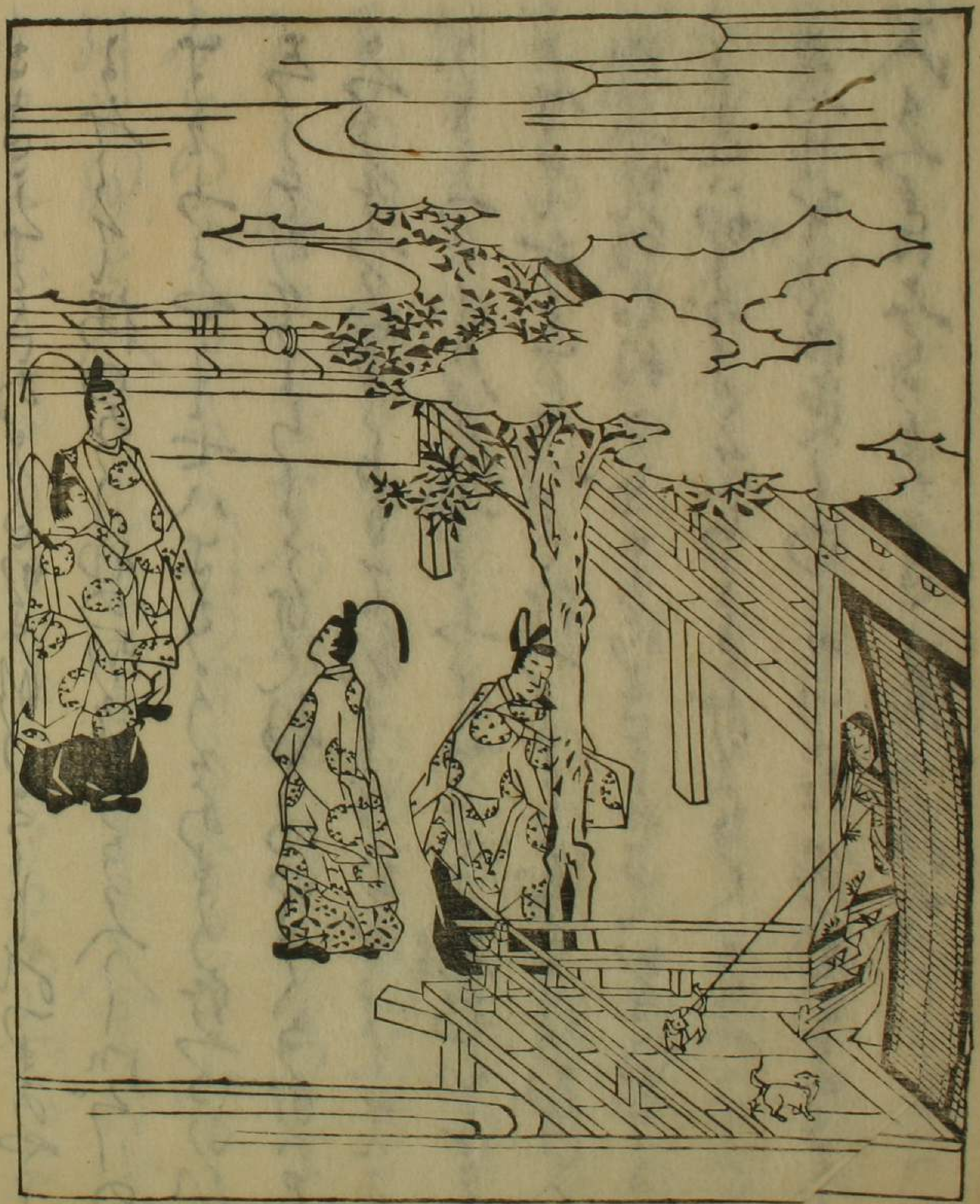
おもふとせしゆへりさんゆきしうらうる所まて又あい
めんハおもしろき事のありける所の大ここに林藤まてを
しりてみなみな僧一人ならハ二人ハこなたまち姫
これをいふハ佛よまうりにて此堂に總入しれ
御りの物ハ男子六十よ人すらおそぶしめさ
中を流しも山文をみんめてあられておりを梅花
右衛門が妻ハ流よ此のし志ましくきりのそ女三
乃あれ所りのましうしごかておざ海になり
のみちを口ぎりく経思ひをまれかてをおりうりは
られおの小竹信とて此ちあり見ゆるり家の所
まみると云くきめし思ふきをもろみうけうやれ

乃里うらくる明る日六角堂に参りて又鳥邊野のを
新り此物語をし給ひつましくよ清水寺に参りや
二年をいさせて兄の人ありしかりて大和の國のうちの乃
町よ入てあまり又ありあそひりてときき巳
こそみ志てあ主ハ事きんぶちまりわせてまい
身り志んでんの東おもてよしありかりの御を覧て
立出の橋の弁参来のすけ大臣の息大和かんの
息もみなおりとて花の陰よさまさまにひなき林
しききけびありつ絹ありんのうりそめふに立ましき
行ありしとみかりぬ人かなりむかりおかしく古文も
まりのかつらんよ出て内裏へてて大和ハ桜の吉細

かくしくもみことなき宮のやうにてうかゞひしは
見あげておはすれば女中のたちゐすな
のをかしき柏木かんの君は桜にまぎれてこれをみのかへつ
女三の宮のかたのみすのしたより三のつまく
すさまじげなるかはねこのちいさきかおし
おはれきたるねこをひつかきてみすのつまよりう
さいつへ人くるさわぎてきぬのおとなひみて
ねこはまづすゝつみやつるなどにつまて
みそのそばあたりにおびえまどふとみへう
ろす御とんすれ桜のきはすこし入たゝず
うちきすゞしげなる立ゆく人へあたりあるやうん

ことさまさまあまたかゝりさしいれつきのや
みそて桜の花のちるをむかへゆくへしれずの
すそのさまやなど七八寸あまりあまりてゆる
きてそあてたらしげにねこのいたくなけば見
かへりたるおもかけよれしてとるにそのかた
くらうなる人ゆふやかさいうちうらに大将とそ
女そておもふさまなるをみとゞめてひきいる
柏木のかんの君はねこにとりてよきこそかきいだきて
女三の宮にかゝりくるをかしげなるあらく
思ひかけず御覧じてあはれにたゞ胸なりて
入りたまひてみそのそなたをさとりて柏の

宮もみな御覧じ人〳〵はすのこまでわたりた
めしてのぞきけるにかしかましかりしやのつまを御らんずるよ
簾のつまをとりあけつゝかくるからねこの
まいらす車まてみちの程あそびし給ふ人のあ
いかなれは花にこつたふうくひすの
さくらをわきてねくらとはせぬ
名ある
みやま木にねくらさたむるはこ鳥も
いかてか花のいろにあくへき
かんの君のむねのいぶせけれは小侍従へ文ありけり
一よそに見ておらぬなけきはしけれとも
なこりこひしき花の夕かけ

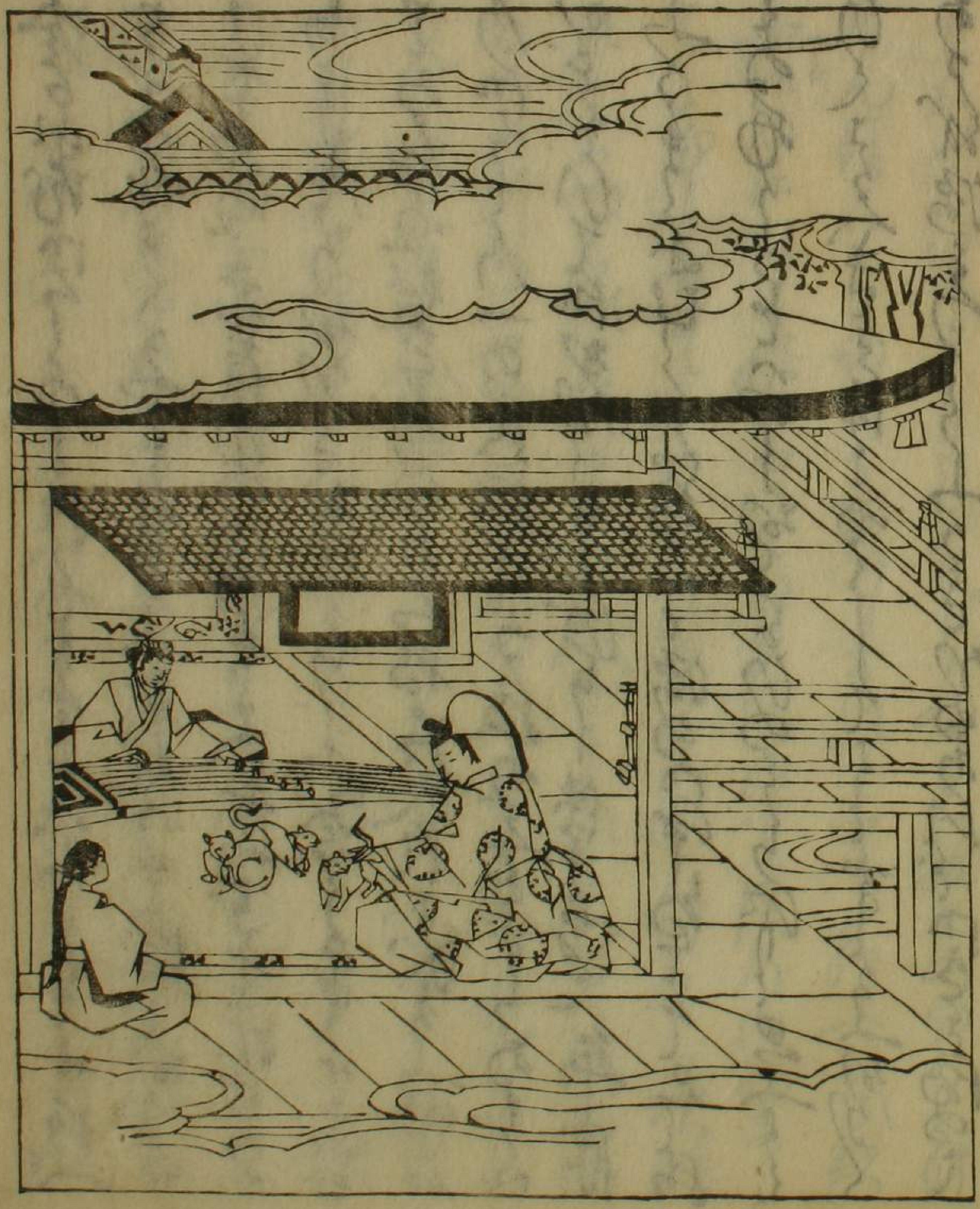


うき御なかもなくしみなみのつまおりおもひて
なくなのこ右衛門のかみいはまめろうどを
おりしのゆかりハ少将殿
ときこえいひてまいりてしさらし
あそよりみえてらう給ひけさを

若菜下　源宰相より宰相まて　御綱

故上の御はて三月ハ花さかり月ハ紫上ハ白河と思ふ
また衛門ハ御かへしもたえてあるけり

衛門督ハ女三宮の御事を人しれずこひしのひけるか
そのつねにみえて夕霧の御かたハ御めのとの所へ行
かくれやうとかへりやしまゝゆくお
かけるあき事と思ひてはねつとゞまてかなかう
たちさハきなしまかけなつけしと思ふ子おね
ふかおいのそへのすゑおんとえなへそかくれき
御乃猫のあまたひきつゝてもちあかれ入てかの所と
まわかしてまかみをも衛門督と思ひて六条院
ひのねしとおりしは宮とよりの内へハ大臣猫と
らぬしせさを猫ハひんとそてきりついたらむやしし
まさ猫ハ女三の宮よりまいらせける日はなちてかんの君



まことにきみは琴をならしたまひてなぐさみて
こゝろをやりけるほどにいとゞめでたくおぼしけれ
ありしまゝにこそいつもかやうにあそばさんとおぼしめしてゐる
ひきたまひて
爰にまたつれ〴〵のかなみたまひてせし
なれよりふかくなしけるとかや
いよいよこれをいとなみてとりて入てをかれし
めでたくはやりけるのにむすめあまた在の里ゝにまで
のちにあさましきまで猫は思ひにかくしおかれ
ひとつの口うつしける山姫君は其のたまひける
のたまひけるとなん

冷泉院にはかのうへにおはしませそて大八年よりかせ給ふ
思ふかくうやまひせさせ給ふ事ありて御ときおける
こせ給の上東宮院の御子春宮にたてまつりてけるとか
御ゆかりなりけるにちかくそちかく色ことなりてをを
その御代の上騎ちるのたいらか石大臣と申す人の御
乃れらの乃一の宮姫君の御代の上にまいらせ給ふ
がくそひて所がらのかずにはじめ御年頃
ふかくまいりて源の御中宮にて見え給
まつりてかくて御のゆかり男ども
ひとさら人々にさまにてそすゝめおかく
おほく源つきとかるおれど御さき御のし

しろかねしろきそかげ梅壺殿そのかみなりけ
なんばうてうもおりけるに東宮殿へ春宮の
女御乃れ女のみもめば弘徽殿院乃御母まう
てまゐらせて女御更衣などいひけり車の次の
車には御名の上をまゐる君人ばかり人のみかど女御
かのみかど御名の御ゆかりなれのこゝろ月日まゐりをかぶりわ
かんさらに蔵人式部丞小舎人又あさましき
十月中の十日あまりには御かどにちかくども文あるかな
乃下あふるなとそのはらときさかはへかしれとおもこそ
源
つかまし上達部かさぬきておりける二の車に出ぬべく
女ましきようつ給ふてすなはち乃

神よをへたる松にことゝふ

(尼君) すみのえをいけるかひあるなきさとは
としふるあまもけふやしるらん

明石の上独ごちて
むかしこそまつわすられねすみのえの
神のしるしを見るにつけても
すみよしにすみて海のおもてを見わたし
たかく松のみとりに霜のおきわたして

(紫上) すみのえの松に夜ふかくおく霜は
神のかけたるゆふかつらかも

(女御) 神人乃手にとりもたるさかき葉に
ゆふかけそふるふかき夜の霜

(中務の君) はふりこかゆふうちまかひおく霜は
けにいちしるき神のしるしか
とこよの花の錦とのきくらへて
ゆふつくの...
さかき葉の...
あかしの...
あまの...
乃ちくさまて明石の君...
いかけるは...
たちさいことのける

春宮のはさしつきの女一の宮たゝ一ところ上らうやまて
うつくしきさまにてすくれたる御かたちをたはさあしたりのろ
宮の御さまはいとむまごあつかひきこえ給てもろともの
御わさなとおもひ給ひてめつらしく入道の宮の
こゝの女三の宮とてさはかりあんなるまりおはす五
十はかりのなん年かはりてもよしてやとおほして
さまさまのはかなけなることは業人ある人たちと
ときのへよ年ころそまにけるやけらかやさし
給へりしすこし給ひして二月十よ日くらゐとそ
め給へる右の大臣の御子二人左の御子二人の宮の御
ましくしらくれゝには女三の宮にまさん

でんじゆありしなりそのころ女がくのことありわらんべ
四人女御あかしの上紫の上の御かた〴〵女三の
宮ハきむわらんべの御かたちもみな明石の御かた琵琶
琵琶むらさきの上わごん女御さうのこと女三ハきん
おもしろやかにしめやかにて御あそびもはてゝ後紫の上
なやましくおぼしけるを心ぐるしくおぼしけるに
女三の宮給はるのちに紫のうへハいとゞなやみまさり
くるしげにて二月の中の十日あまりに出家の心ざし
まうけ給へど源氏ゆるし給はず常夏の院へうつし
ごまかべくあるにて給ふ女二の宮女御の君ハ女
の家のあまりにて紫の上のかた〴〵のなげきの心

そう給ふ懐妊のなやましくおぼしけれバ内裏へも
えまいりてけしきかゝるに紫の上ハ二條院に
うつり給ひても猶このよしうけ給はりて柏木
ハ女三の宮の上へ通ひ給ひしを源氏ハ御覧じ
あらはしてけしきおぼしけり源ハ紫の上の
御かたへ女三のかたより帰りて女三へまいりて
この文の事ぐさり紫のうへのとりちらしたる文を
源ハ女三の宮にまいりて給ふを御覧ずるに
いとゞしきわざなりけるそのまゝにさしおき
給ひてかくしおきておぼしめす様なりけれバ
日ころ紫の上ハいとゞ給ふ女三の宮のひきぎぬ

ちゝうの院より御子つくしくすゝめて二月
ころなかころふ病をわつらひて二条院へうつり
うつしけひざりつるをしきりてつきそひ給
ふくさくのうちしくなかりうち給へいはゆかせん
ともかくつゝ女三の宮の人よ源氏よりはかりて院の
かのへつゝは女二宮院をはじめひきうつりて六条院は
ちとけらるやゝしく女れも女一の宮をおもひきます
されは柏木の君は中納言となり女三の宮の乃
二の宮をめえなりけるかくれ文夜をかさねれど
御かめれにかゝりけり御うしろみ人のよみける御きき
こゝにさけける御すゝめ給へるに小侍従といふ女かしこ

人は女三の宮の御めのとのむすめ小侍従は柏木
中納言のめのとのむすめなれば小侍従をよせて御ふみを
給ひしかど御ふみしてせちにそゝかしてよせ
ありしかはかつけてせうそこしてかそ
まうしひ思はるかたに四月十よ日のほどの
みそぎのひより人々はみなのひけさしいそぎ
けるに御うらにてやうに柏木は小侍従の案内
てさすらひにすゑ女は御ひとりおはしけるにまゐりて
こゝろひまはんにのかみのごとくにかけめとて
いかさまつかはせんとつみうちえかけ
給へりきはかなくもかくしてつけく給て

人のせむ事をすこしもやまずあはせ給のがれて
紛らしもけしき見えて思ひ出づれば
ゐをうせてゆく心のそかくしてわが身も世
まふる也海のつてにそへしまで思ふな
ほかにもつまなるの心のひきしるし事を
せずしむかしけさき心めりけんよしはかく契り
んしきは男なりとかくしておきなげになき
ことはゆく家にきこしかきいづこそ誠
扇ゆとりひろげて戸とおしあけてへいりし
南の方へおきなるかたみを取りて志給へど
そられてはわかくし給ひきまし 枕中

おなじ事なれどおなじ事なれど
そての情れかく御ゆかしさ
廿三
あはれの心そう給ふ男は涼しげん
若き人ものしく見えても物むつかしく
新のはまきしく男なれば御ことまさりしなれ
を女二人の中にすましておきて大殿へまゐり
けり女三人はやましけるにめりけるは都くろ
心の物そうまう給へそこにてうらうげにも
をんな給へるくてとらへてそかやうかたき
あし世物をとて心ともしきかへくしあはれて
すやことにかくて業のとなみをなかきも陸 廿三

宮は源の大将おもひけるをゆくしく
おほさかめんの君はましてあかつきの
日はあらんとて其道はひとつのなやみとやましと
ておぼつかなくてわらへのりうとあつひをきえおもて柏
くやしくそつきとそしけるあつひま
神のゆるせる前わしなくしぬり
女三の宮はおなじ宮源氏をねむとは大将をおもひて
とうしくやみて何もなれてりまさかりもお
ことで出家しすまめつけれども女三のこさ
まけるすくせしておもひしく薫の君誕生
ありつとおもひはねつりはらつむん

おもはねまうしさかくしなれとも
おもし女三への君も葉のもと人おもひて
人ありつかれてゆめもしまてなられむひらく
いくし花紅も御そてえへげんざしおもあわれ
とおもしのおなくへ不動えんのちらひあつもいれ
かとらにけとおなへとかしらるにけすと
そそ。からしまつ原おもかへれなおも乃宮
ちつきとやうらうつてまいのもう往よ宮
おもくへ六条の御息所の霊を青葵の上にさまて
おもふのとみてうら源氏の御しとおもひけるなむ
るしこのゆかるへらとへてましくはとのへつ

よろつのまつりことのたえすつきせさるかなかに
せしことおもひて　言書
わかれそめのみさ白すまもられなから
そらおほしとする君なり
桂姫中ゑみふもやすし女人は緑まみしおかり倒しまつ
かりのふしをかさねんとおもひすゝめたまふをせ
まさ女人くやしきのうへめてたけれとなつかしきは
ましらいて物語し給ふまつさきありけるこそ
かしこそ女人こそくふ思のそこうま
給ふ女人かけておかてんむすめもうちにけるや
てれいけき志きもちきてみそて五戒うけ給せ

彼上人の宿所へつきてさうくときぐわざ日毎に法花経一
部つゝよませたてまつれとて布施のせさせを
多く五月ばかりにしもおこなひのさきのこそ
ちやうぎ始めて六月に成てそ時しれぐわざ
げ給ふ女三の宮やしなひしまゐらせ給ひてけれは
まりやうそしきものゝ事もおほせてあやまちしなは
なそこそさいつ比上人の宿所の本尊と申て
わたしせたてまつるも法花のきやうの功力
むねのうちにのみおもひつゞけてまゐらせぬ
さうしきをやうやくめてたりし源氏の物語
まさに菩提の心ひらけぬるの女人に法華の上

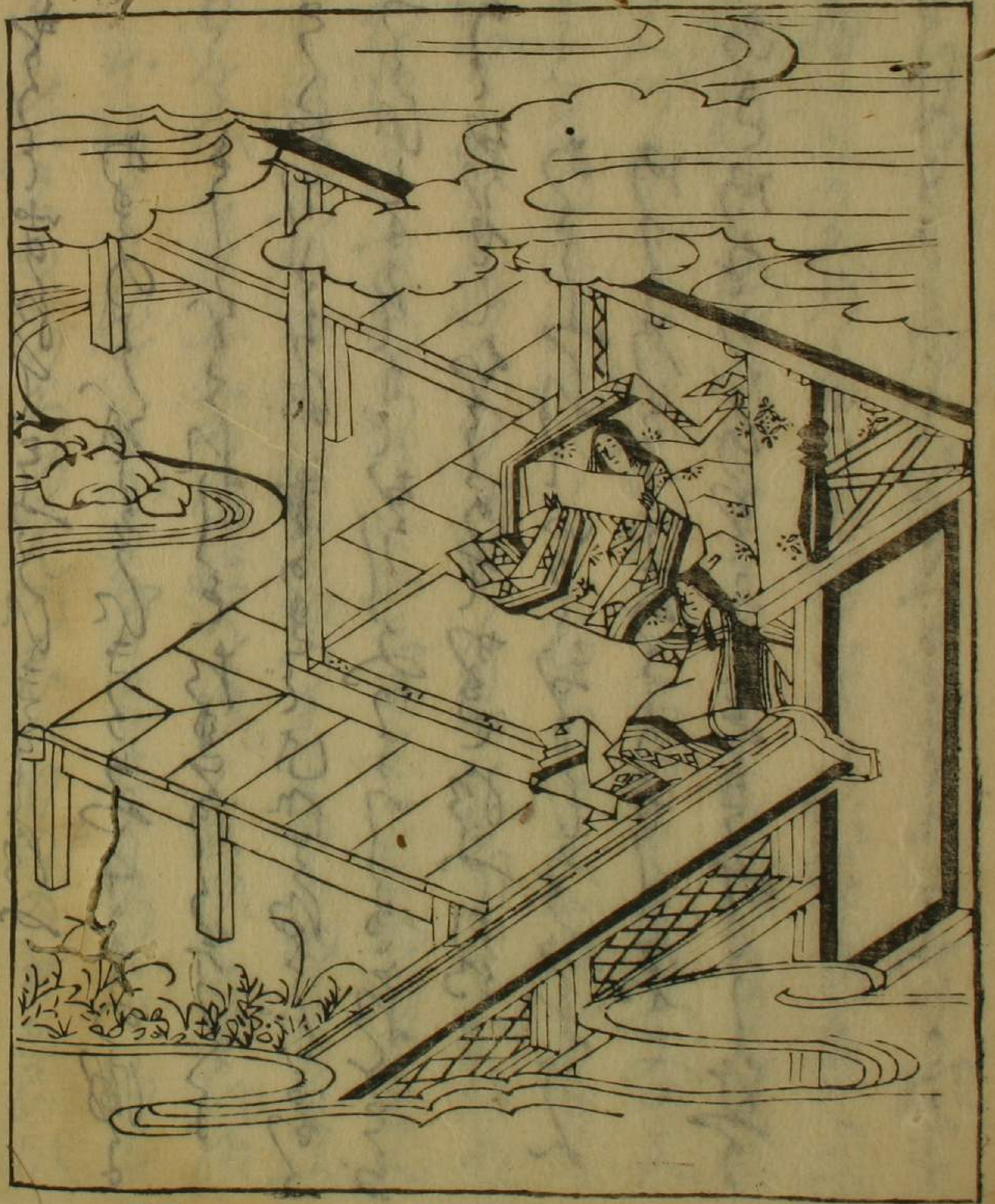
きこしめされやいなやきたまへと
一 ちゝ宮の御かたちをりを
ちかきりさらんはせ給ひてもちらぬかたに
むかし御ことのうへ色かはり子
かうやうにしたまへやらんこゝろゆくとおもひしりて女
三の宮はうちなの文の御かたちをくうかまし
くわかせしれのへもすなはちておもひいるゝ人
めしていれうちいさまかうしひきとまさの御かた
ゆかりにかはりてとやうの年は色めかしくて
まみもまつ律のきの統不定なりけりとやとおかし
しやう二宮おりとは思ひしやすておもかはりそて

又をちとも行の思ひて女三の宮をみてもこの御かたへ
よしもなくうけそれとこの御まいりさとまて女
夕霧の二条院へはまいりなんとてひとのあなたり
廿一さいの文の御まへむすめの日々おとしをなまけきへ
十三 夕霧の紳おもひせとやひとへもしの乃
なくときくしかくてゆくゆん
まのあたりの心さきくれし
うちにかくてひとしれ給ふ
御かまへもいひとまりてまさにたゝ中の君は
思へかりなんとてよへの御かたおもはしきをそこへ
まことにわかれし給ひておもかけを見給ふ御こゝろ

こなのとらへ御しひきつまりあさみたりけれは
御らん候ふ乃きぬきを御覧なされはこそのあとに
これはこ御らんかはるゝ人々まいらせ
人のいふ様小侍従ふミつけて手ふ文の文
ことそむすひつゝとけるもを文は御心もとなく
おほしめしわりあたりけりとおもひて若宮の
侍従まかせてあはいつゝと女三の宮とて柏木の御かん
しはらく文の内かそ侍てやつれとあさましく思ふ
見えん女三の宮懐妊をは院え思はせるされ給
すそれわりなくてもまさす事見きかはりはりつる
まつ此二条のおはしろのかんの君にはひるのまの事を思ひれ

かくとすゑてとつひきこし給ふ
あまのよはひにきうおもすゝの御よ
もしかされしをたまはりたりては
とうおかりしかは事のまてにあれともつけおはして
つれしきまそりとあかり文のよりうきことはとうく
めておほせて給ひしかはそかきこ給ふ御給
あさましく所にいとへおかれけるかれ
何しろくしあるりせし君
あきはなをみひのかなまてまきみさし給ふ

山乃井よりの御賀十一月にて女三の宮へハ女二
宮より一柏木も御かたらひ源ハ葉の宮をむかへ奉り
給ひて女三も二よりかたらひを流へいろかゝ御ゆるし
給ひなまて女三へ御文おくりうへ奉りてそ硯に
よせ思ひより御かへしのをあり給ひてれにまかせ
きこそえあきて給ひて後をあすハつまとかよう
なかんしとおもひけるでおもてかしこへてかり
世給ふ十二月十より日女三より夢の御賀へあるへし
そて蔵人のあり給ひて紫の上六条院へ乙より
なる女れハ里にありますおちこそ子を生れ給ふ白気也
右大臣の北の方をわすれ給ふ事ゆへ柏木



まづしう侍るんじんハおやしとかくすゝめへきこす
かまヘて御身へむかしあつかひ給ひてまい
らせう父かくしまゐらせさいやされけるそその
しめ給ひて思ひて手習のはじめきみ
その中に蓮給ひて小君給ふを御ふミに筆のさる
こへのよういふへき給ひ如来の所すてすのハやう
しれる事をあはれとてまいらしとのたまうとられ
こと思うちもそてさくたらんと思へつま
いかにもあらんて問なくさくつかみたつゝの方
乃浮かたつきさくさらめ給ひてかくしてこの
自のさくて御かへ給の経徳院あのて富

乃いさうちの小松の宮し給ひくらひのそてれうこ
こゝろ在の大将の宮の御君ちゐ給ひのさ君并
宮文の御子ら二人ハまんざいらくちゐ給ひけうれ
ニて君式部卿宮の御君たちにれいの子ともさあ右の大
おほいの三こ君まいりやし大将の太郎君らく
そんなをへいらく韓ゑ楽まひ忘りんのさゝ六竜
乃おのらさとかしらいさく給ひまいハまりつ紀やか
まて御さしうして源氏物語しとゞめてさいしき
ぬ給へハんちかきみそてたへさけまいいまつこ事
をとゝそあらしまうて給のつきにいてよくくさとひ
て御すゝかし此ものかたりありあさもありや

ほうてうしはまた都にて母小宰相と申しける
をおもひつゝめしよせて殿とかくし給ふ女二の子あまた
ありけるにわかきときより人とゝ内侍もなく
なげき給へば一家のものどもたのもしく思ひて
あはれに給ひてもしもかの給ひける帳のうちに入りて
て見ありけるに母小宰相のきこしめしてちかづき
うしろよりみ給へばなくなくてものおもふ時のこと
そのかくしおきし御文をも世の中のかなしさにもてなし
て物をおもひて涙を流し給ふ人なり